

7216

鐵刀村正

鐵刀

の
し
ら
せ
り
ま
は
ら
し
ま
し
た

一三齋文見口演
高昌波、即建地

東京
文書館
發行

近來文學の發達を期するの時に拘はらば人氣の傾むく所として
一の奇觀を呈し文學的小説は却て衰頽して講談速記なる物夥だ
しく流行し小説書肆は概むね之が出版に従事し新聞雜誌又脱つ
て之を掲載するに至り今は殆んど其の流行の極度に達したり凡
そ人をして喜怒哀樂の情を起し恰も其の狀態を目前に見るが如
き感あらしむる物は講談の速記なり但し小説家が文を草するが
如くに心を練り時を費やそにあらば辨に任せて口演するおれば
文飾麗艶あらざるは勿論にして且口述の儘なるに依て偶々重言
若くは片言等あるを免かれまといへざる面白くして解し易く時
として文章にだに能く綴り得ざるの妙あり又其の口述の儘な
るに比すれば寧ろ拙劣なる文章に勝るとも劣らずといつて不可
なく故るに此の流行を極むるに至りしは我が信じて疑がはざる
所あり。



特 10
12

名 村 正

名刀村正之傳

第一 席

一立齋文晁講演
高畠夢香速記

今般書林文事堂御主人の御依頼を受けまして茲に口演いたし
まするは正宗十哲の外なれども其の切味は諸國の名鍛治に勝
り師の正宗さへも大いに怖氣を振つたと申しまする位わの名
工村正の傳記を申し上げます是れは五郎正宗の起りより申しま
せぬと村正と云ふ人の成立ちが分りませぬゆゑ相摸鍛治の起
りより口演いたしませる、
抑も相摸鍛治の元祖は備前の國の住人三郎國宗と云ふ人文永
の頃始めて相摸の鎗倉に住居いたした然るに夫婦の中に男女

五

之に依つて弊堂は在來數多の紙型板木等を有しつゝあるに拘はら
せ更に講談師及び速記者にして最とも巧妙熟練なる者に頼りて
後士四十七士傳太閤記其他著明ある長編物は申そに及ばず一冊
讀切にして面白きを撰み既に數十點を發行し猶益々其の事業を
盛んに勉め居れり大方の諸君幸ひに弊堂が機に敏なると業に勉
勵なるとを愛顧せられ澤山に御購讀せられんことを希望に堪え
る。

但し裏紙の目録を御一覽あらん事を願ふ

文事堂 主人 敬白

止 村 刀 名

四人の子供を擧げさせ、長男を新太郎、次男を新藤次郎、國
廣三男を新藤三郎、國廣四男を新藤四郎、雄廣此の末の子の新藤
四郎、雄廣と申します。者は親兄弟の打上げました刀で多く人
の命を落しました。ゆゑ自分一人は出家して罪滅ぼしをした
と云ふので十一歳の時に下野國二荒山に登山いたして後に大
進坊と改めた併し出家をしても刀を打つたと申します。こと
は悉く世の人の知る所でございませう。所が國宗の妻が亡なり
まして後妻の腹に出来ましたのが有代と云ふ女の子。それ故男
女合せて五人の兄弟でございませう。さて此の元祖の國宗が亡な
りまして後に國宗と申す名は長男新太郎、國重が相續いたしま
した。そこで此の有代と申す娘が十七歳の時に二代目國宗の門
人新藤吾國光の妻になりました。此の國光の門人に藤三郎行光
と云ふ者がある。此の行光の子が五郎正宗で、其の鍛へました劍

正 村 刀 名

の價は無上別の出來三千貫としてある。然るに正宗に一人の娘
があつて、江州高木の住人彦四郎、貞宗と云ふのを養子にして、此
の娘に娶せました。其の間に一男を擧げましたのが九郎次郎秋
廣。又秋廣の子を秋義と申しました。因みに附けて申します。が
正宗は應長元年正月元旦の出生元弘の年二十一歳、正廣が二年
續きまして建武が二年、延元が二年、新田義貞、正廣の二年、鎗倉を
取る北條高時、自害に及ぶ。此の時に正宗百三十五本の劍を二年
間に打つたと申すこと。但し無銘にて出すもの多く在銘のもの
は餘り出ださぬと云ふのが正宗の持前でございませう。然るに元
弘の元年、楠正成が義兵を揚げました時に二口の太刀を鍛へま
して、正成の許へ送つたと云ふ位、延元元年、楠正成戦死をいたし
ました時、には正宗百日の間と云ふもの、毎日回向怠たらずして
正成の菩提を吊らつたと申すは、實に義の深い人でございませう。

正 村 刀 名

正宗は正長の元年九月三日七十四歳で終り交した此の正宗が
取立てましたのが即ち此の講談の主人公たる村正でござい
す毎度正宗十哲と云ふことを申しませるが抑々誰々を以て十
哲と致すかと云ふに相州給倉の住人九郎三郎廣光越中の國松
倉の住人郷右馬守義弘同國御復山佐伯の住人五郎次郎則重筑
前隱岐濱の住人左衛門三郎左文字深州志津山の住人志津三郎
兼氏備前の國長船住人藤兵衛尉長義同じく孫左衛門尉兼光京
都油小路の住人長兵衛尉國重深州關の住人道阿彌金重岩見國
出羽の住人久左衛門尉直綱以上十人を即ち寶龍齋正宗の十哲
と申します
さて仙吾村正と申しまするは九代まで續きまして仙吾一家と
申して其の流儀を傳へました其の祖先は伊勢國桑名の者で
ございまして北面禁裡の武士でありましたが村正の父仙吾喜左

正 村 刀 名

衛門村義と云ふ人の代に武士道を捨てまして妻の唐菊と諸共
に給倉の雪の下に來り百姓の中に入りまして世を無事に送る
決心を致しました然るに夫婦になつてから十三年間經ちます
るけれども未だ子供が一人もございませぬ依つて先祖より己
れの家の守護本尊としてある勢州桑名の千手院の千手觀世音
を夫婦の者が日夜祈り申した申し子は祈るばかりで出來もせ
ず神とまおとこする氣なりと云ふ悪口がございませぬ併ながら
觀世音菩薩の感應をいたしましたものか或は天から授つたもので
ありまするか延文の元年五月五日の早天に男子出生いたしま
して七日目に仙吾太郎村正と名を命けました七歳の頃よりオ
智は普通の子供に増しまして能く夫婦の手助かりを致します
親として子を思はぬものはございませぬ三千世界に子を持つ
た親の心は皆な一つと申しますものは眞實のこと夫婦の者も未

正 村 刀 名

願もしく心得てをります丁度十三歳の秋今日は鎌倉へ参りて中々八幡の御祭禮近郷近在から参詣に参る者なせありまして此の賑ひでございませす喜左衛門は妻に向ひ喜左唐菊や私は此頃病氣も好い鹽梅に癒つたから八幡様へ御禮参りをしやうと思ふが何うもまだ本當に肥立たないから今日はお前が悴を連れて何うか代参をして来て貰ひませう早く行けば餘り群集をしない中に参詣も出来やうから……と云ふ夫の言葉に唐菊は唐菊宜しうございませすそれでは私は悴を連れて御参詣に行つて参りませ程に留守は何分御頼み申します喜左ア留守は私がするから案じないでも宜いそれでは仙吾やか前は母の供をして八幡様へ参詣に行つて来るが宜い常に村正を呼びますのに仙吾と云ふのが口癖になつてをりますそこで母の唐菊は支度を取し十三歳になる仙吾太郎村正を連れて八幡様へ参り

正 村 刀 名

ました頃は應安の元年八月の十五日足利の天下三代北山の太守義隆公の御代でありました何方へ参りまして此の祭禮場所と云ふものは賑ひませすもので殊に鶴ヶ岡八幡の御社内は其の群集難沓いたしますこと一通りでない母子の者は人の混雑する中を彼方へ潜り此方へ通つて纏てのことに御社前へ参り紙に包んだる鳥目を祈禱の爲にと差出して参詣をする神官は供物或いはお札の類ひを呉れる参詣を終つた母子は是れより御社内を左方に抜けると向ふの森の前に茶店が一ツ所ございませす用意の重詰もあり最早正午過ぎのことございませすから其處へ遁入つて参りまして唐菊御許し下さいませ女はお懸けなさいませ此方の方が宜しうございませす唐菊それでは少し貸して戴きませす……仙吾やア其のお重を開いて食ませせうと海苔巻又は五もくと二通りばかり手頃のお重の二重

正 村 刀 名

ねに入れてございますのを母子水入らずで往來の方を見ずに
唐菊「サアお前食べなければいけませんね物を食べる時に其の様に
下を向いては毒でございますものと頭を上げてお食べなさい
い女が物を食べる時は下を向いて宜いもの男は眞直に坐つて
物を食べるもの決して粗忽をしてはなりませんと云ふは固
り武家出の持前儘かなことにも禮儀を教へつゝ漸く御膳を食
べて了ひましたお茶代を紙に包んで盆の上に載せて置唐菊
仙吾やお前彼處へ行つてモウ一杯お茶を差して戴いておいで
村正「ハイ」と急須を持つて來ると女「どうもお坊様懼かりさ
でございますサア此方の方が新規に入れたのでございますか
ら……」と新らしく茶を入れて呉れる唐菊は茶を飲みながら
唐菊「私は少し足休めをするからお前は其邊で見たいものがあ
るならば見ておいで 村正「阿母さん有難うございます私し

正 村 刀 名

は此の様に偶雑をしてとります所へ這入つて押しつ押されつ
致しますのは嫌ひでございますから阿母さんが足休めをなす
つたなら歸ることに致しませう 唐菊「さうかいそれではさう
云ふことにしませう」と聊か足休めをして 唐菊「それでは女中
さん此處へお茶代を差置きました 女「毎度有がたうございま
すお氣を付け遊ばしました今日は天氣が好しうございますか
ら昨年よりはお賑やかでございますアレ又向ふの方からあの
様に人が押返して参りますからお危なふございます坊ちゃん
お氣をお付け遊ばしましたと世辞たらしく申しますのは客商
賣の常一禮なして唐菊が先立ち後方より悴の太郎村正が續い
て参りました漸くお鳥居を出て是れより雪の下へ戻らうと云
ふので道を右方へ」と取つて参り丁度向ふの並木の所へ進
りますとアレ」と云ふ婦人の一腰助けて呉れと又呼聲 唐菊

正 村 刀 名

ちよいと仙香や何だか分らないが向ふの並木の所でお武家方
が刀をお抜きなされてゐる様子何か是れには仔細もあらうと
見ると十四五歳になる娘を二人の武士が斬らうとしてゐる
村正阿母さん本當に酷いことをしてをります私が一す行つて
見て来ませう 唐菊「イエお前はア、云ふ所へ行かない方が宜
いからお止しなさい」村正「ナ、構ひはしませぬ 唐菊「イエ危
ないから」と云ふのに……」コノ仙香やと云へども聞かず村正は
逸足なして駆けて参ります打つて廻つて此方の武家は「甲」
レ無禮千万な奴だ何と心得て武士たるべき者に突當つた盲目
ではあるまい此方は上杉陣正大弼則氏の家來本道藤吾鎌田一
八郎と云ふ上杉の家にては堂々たる天下の豪傑だ殊に今日は
我々も御酒下され一杯機嫌で八幡へ参詣いたした戻りの道
じて婦人は不淨氣のあるもの其の分際と致して斯く云ふ我々

正 村 刀 名

兩人へ對し突當るとは何事所持いたしたるは新刀の一刀唯今
其方等の首を擧げるから左様心得る」と後方へ退つてアハヤと
見えた所へ村正其處へ駆けて参りました 村正「モシお武家機
方少々お待ちなすつて下さいました是れは通り掛りの者でござ
いますが見受けます所何れも私等同様の子供のこととござい
ますから何うぞ御勘辨なすつて下さいました私しは此の人達を
知つてゐると云ふ譯ではありませぬが自分の年に較べて見れ
ば丁度朋輩同士私しも阿母さんの供をして八幡様へ参詣に参
り目出たい神勇みの時に貴方方が刀に血を見ると云ふことは
却つて不吉なこととございませうから何うかお免しなすつて
下さいませし私が跡へ残つてお詫を申しますからナアお女中さ
ん達は先さへお歸りなさいませし之れを聞いて右の娘は大きに
喜こび供の者にも目で知らせ早速下手の方へ行きました鎌田

名 刀 村 正

一八郎大音を揚げて、一八汝れ怪しからん奴だ汝等如きが聞
へ透入つて彼是れ云ふ場合でない。藤吾さう云ふことを申す
ならば此の本道藤吾が一刀の下に斬つて呉れんと足も四途路
にて泥に酔ひたる剛の如くになつてゐるがいきなり本道藤吾
は村正目掛けてハッンとばかりに斬掛けましたアハヤニツに
なつたかと思ひさに流石に村正も七八歳より親に就いて覚え
たる劍術、ヒラリ体を轉したから藤吾は刀を持つたなり並木の
根ッ子に躓いて仰向様に打倒れました鎌田一八郎は之れを見
ると一八汝れ同役へ對して無禮な奴と一刀振り上げ斬り込
んで參る其の下をヒラリと潜つたが其の早いことは雲間に閃
めく雷光の如く足を上げて一八郎の脇腹を蹴ましたからドッ
とばかりに目を死して其所へ倒れました村正はホッと思吐
いてゐる母は此の体を見まして慌だしく其處へ駈けて參り

名 刀 村 正

唐菊太郎やお前はア大それたこと此の様に何れもお歴々様
方にご無禮なことをするとは飛んでもないこと後の難儀にな
ることだから今の中に早く歸つて仕舞はないと恐ろごさいま
す。村正ナア阿母さん管領職をお勤めなさる上杉様の家來だ
とお主のそとを頭に懸けて威張り散すやうな奴は此の位にし
た方が却つて後の爲になりませう、それでは阿母さん參りませ
うと其の儘に此所を立去りました、本道藤吾、鎌田一八郎の兩人
は漸く起上りまして藤吾何うだい鎌田今の子供は何と云ふ
強い奴だらう一八オウ、間の悪い時は仕方のないもの向
ふから番頭とお目附が揃つて來た藤吾イヤ此處で番頭
お目附等に彼是れ言はれては我々が職分に對しても一大事を
醸すこと、是れは道を變へて參らうと藤吾一八は其の儘道を變
へて戻りました抑も此の村正の爲に助けを受けました娘は

名 刀 村 正

何人ぞと云いませうか是れ當時鎌倉表に名を得ましたるに
鍛冶源氏山と云ふ所に住居を致す名代の寶龜正宗の娘でた
かねと申します者其の身が八月十五日の出生八幡様のご縁
日に當ると云ふ所で例年此處へ参りまして参詣を致しませ
るに今日圖らずも武士の爲に難儀に出逢ひたる所を村正の爲
に助けられた立歸りまして此事を父の正宗に申しますると正
宗も悉く喜びまして正宗さう云ふことなら私が是れから
其の村正と云ふお方の所を尋ねて禮を述べて参らう毎度家の
前を通るとは私も知つてゐる併し口を利いたこともないが
評判の親孝行それでは直に行つて來ませうと正宗は支度を致
し供も連れずに只一人源氏山より程近い雪の下へやつて参り
ました正宗お許し下さい仙吾村正さんのお家は此方ござ
いますかと叫喚なる案内に母親の唐菊は其處へ立出でまして

名 刀 村 正

見ると顔は存じてゐる正宗でございますから 唐菊「是は
先生入來つしやいましてサア何うぞ此方へお上りを願ひませう刀
鍛冶でも番鍛冶ぐらゐになると先生と申しますとどうも講釋
師の先生などは譯が違ふ我々社會の仲間が先生と呼ばれま
しても ○何うだい先生夜講は何處へ出てゐると怪物と同一
にされる夕方なご人の家を訪ねますと △先生よく來なすつ
たア茶でも飲んで行きなせニ……あ、ホツ／＼雨が降つて
來たオイ先生一寸外に出てゐる襦袢を取込んで呉んなさいな
と云はれる其様な先生ではいけませぬ正宗は娘が今日難儀
の所を村正に助けられました禮を厚く述べさて四方山の話を
致しますと村正の父の喜左衛門を始め妻の唐菊何しろ禁裡北
面の武士の出でございませうからいくら百姓に落ちてをりまし
ても賊に其の様子や口を利く所は穩やかにして立派だ大層話

正 村 刀 名

が合ひました所からは是れが縁となつて正宗も折筋遊びに参り
喜左衛門も正宗の方を訪ねると村正は一体刀を打つこと
が大層好きでございませうからそれからは折々細工場へ遊びに
参りませう或る時のごとで正宗は一口の刀を鍛へ上げたから傍
への坐敷で茶を飲みながら休息をしてゐると細工場で一人の
弟子が ○サア仙吾さんソレ其の槌を持つて宜いかい「ソ
ン、カン…… ○旨い…… 何うだい正方 △何だい正利
○外ぢやアないがどうも仙吾さんの打つ所は法に適つて行末
願もしいナ何でも子供の中から叩き込まなければいけない
ソレ宜いかい仙吾さんモウ一度だ「ソン、カンと頻りに金敷
の上でやつてゐる音を正宗は耳を引立て、聞いてをりました
がソツと隙間から覗いて見て是れはゑらい確かに物になる可
成ハ是れは何うしても物になる ×先生何處かでボヤ〜が

正 村 刀 名

始まりましたか 正宗馬鹿野郎何で其様な減らず口を利いて
ゐるんだあれを鍛へて仕舞つたらば仙吾さんを一寸此處へ
んで来い ×へエ暫らくすると村正は正宗の前へ来て 村正
先生毎度御邪魔に上ります何か御用でございませうか 正宗イ
ヤ外のこともでもないが遊び盛りの年に似合はず降つても服の
ても私共の細工場へ斯うやつて来なすつては此の職業のこと
に心を付けるよと云ふは感心なことだ冗談にしてゐるのでは
かないがウンと一つ一一生懸命に此の業で名を揚げ子孫の繁昌
を見やうと云ふ心懸けなら私も見所があるから阿父さんにさ
う言つて私の方より好んで弟子にもしてやらう何事も今若い
中に心を定めて置かなければいけない人は中年後少年と三
つに別つが一番大切なのは中年の人少年の時に取損ふたこと
でも中年の運氣を取損ふはぬければ必ず我が一代に身を破る

正 村 刀 名

つてをりまする正宗も之れを聞いて大層感心いたし
う云ふことなれば私の思ふ所と合つてゐる子として一日も早
く親に樂をさせたいと云ふ其の決心は感心それでは私が此の
頃に行つて雨親に話して上げやうと云ふので村正も喜こんで
其の日は歸りました兎角する中に其の年も經らまして應安の
二年正月の初め正宗は支度をして供を二人連れて参りました
のが雪の下村正の宅父の喜左衛門は立出でまして喜左見
れば生先能くお入來でございませすア何うぞお上り下さいま
し 正宗先づ新年は目出たく申納めませす喜左御同様に目出
たく申納めませす 正宗是は些少なからお年玉の印まで
喜左有がたく既敷いたせませす手前方はよりは罷出でませぬ
何はなくとも屠蘇一つ粗酒一献を其處へ酒肴を出しませぬ
夫婦の者は斐應を致しませす 喜左付きまして先生毎度手前共

正 村 刀 名

第 二 席

と云ふことはないものだア此のお菓子を食べてお茶でも飲
んで能く考へてを覽と已れが悉く苦勞を致しませしたる正宗
他人のろと、首ひながら村正が親孝行と云ふ評判であるから
我身に引き較べて一層正宗が力を入れました、剛手を仕へて
を低げ兩眼に涙を浮めてをりませした村正がさて何と答へを致
しませるか一息吐いて次席に申上げませす、
暫らく思案を致してゐた村正はやがて心靜かに面を揚 村正
實は先生私は何うぞ此方櫛の業を覺えて一日も早くを兩親様
を安樂にお養ひ申したいことを專一に心懸けてをりませすやう
ぞ私しからも兩親に願ひませす程に先生よりも宜しく願ひま
すると言葉は短かいが申しませすことが能く前後の寸法に合

止 村 刀 名

の悪戯者が出来しては何かお邪魔を致します。正宗何うい
たして此方の御子息はお見上げ申した御氣質は私共へ來ら
れて刀を打つことに目を着け慰みに打つ槌は天地陰陽の法に
適ふて適れ末頼もしき技倆殊に此の業を學んで兩親を安樂に
お養ひ申したいと云ふことは是れが人の見てゐる所で親に孝行
をしたからと言つて之れを親孝行と言ふではない子たる者は
兩親の教訓を常に背かざるを以つて親孝行の始めと致します
私しも繼母の手に掛つて泣いたことが澤山あります。ゆゑ私
更此方の仙吾さんには感心いたしました併しお見受け申すに
性來魚立つ氣が激しく尤も男子は女子と違つて人に負けるこ
とが嫌ひと云ふことは有り勝つものなれども武家衆の心刀殿
治の心商人の心とそれ皆な違ふものであるから其の職分
を大切に守つてをれば間違はない付きまして仙吾さんを私し

正 村 刀 名

の弟子としやうと思ひますが、兩親のお許しもあれば誠に今
日は吉日でござるから此處で師弟の固めを致さうと思ふ。そ
こで師弟の間になれば親子も同じこととござるから、攻折極は
致さぬけれども後の爲に相成るやう叱言は申しますからさう云ふこ
事があれば改めさせざるやう叱言は申しますからさう云ふこ
とがあつても貴下方は悪しく思つて下すつてはならぬ、それさ
へ御承知ある以上は本人が好める道であるし好きこそ物の上
手なりで必ず立派なものにならうと存する。是れだけのことを
貴下方に申上げやうと心得て門弟共に申付けては話も十分に
届かぬから自身年頭を掛けて罷り出ました次第でござります
と、穏やかな話を聞いて夫婦の者は大きに喜び、喜左殿に有
難いことと云ふいす何うか宜しうお願ひ申します……
仙吾先生が感銘に仰有つて下さることを有難く心得て是から

名 刀 村 正

は先生を親と慕ふて一日向なきをせず仕へる所は明らかにし
なければなりませぬ 村正「それは二親様を安心なさいまし
決して二師匠様の仰有ることは背きませぬ 喜左「オウ左様な
うてはならぬ」とこゝで相談も罷りましたから土産物其の外
の支度と致し是より村正と道同して源氏山の屋敷へ行くと
になり親の喜左衛門が送つて参りました喜左衛門は一夜泊り
まして翌日は尙ほ呉れくも我子のことを頼み程遠からぬ
の下の己れが家に歸つて来たさて正宗は村正を自分の弟子と
しましたが固より見込があるから一生懸命になつて教へる他
の弟子には餘り叱言は首はないが村正と言ふと小さなことで
も嚴しく叱言を申します自分の爲になることゆゑに村正も思
しくは聞かず正宗の申すことは親の喜左衛門の教へ呉れるこ
とと同じう思ひまして何事も背かないから腕前はノキノキ上

名 刀 村 正

達いたします愈々以て師匠正宗は末頼もしく思つてゐる其の
中に早くも三年の光陰が経ちまして村正が打つた刀は兄弟子
も中々及ばない程見事なものが出来殊に修業中師の許しを
受けませぬければ決して親の家へは参りませぬ之れを正宗は
誠心込めてゐる親の家が近いと大概は主人の目を忍んでは
参るものだが村正に限つて決してさう云ふことは一度もない
然るに或る一日村正の二親が旅の掛装をして源氏山の屋敷へ
やつて参り 喜左「其處にゐるのは仙吾ではないか村正「是は
二親親様能くお入來でございます旗立のお扮装で何方へ出
でになりますか 喜左「先生お在宅ならお目に懸つて少しお話を
したいことがあると申上げてお呉れお客様の御差支等があつ
てはならぬから能くお前が氣を利かしてナ 村正「ハイ是こま
りましたと師匠の命令で他所へ使ひに参つた村正二親より先

正 村 刀 名

きに参りまして使ひの用向を町に申し其の後とて村正さ
てお師匠様唯今雨親が草鞋脚絆を穿き旅の姿で参りまして貴
方にお目に懸つてお話をしたいと申して門の脇の所にをり
ます 正宗其様な他人行儀をしないで何故此方へお入れ申さ
ないと氣輕な人でございませうから自身に正宗は立つて参りま
して 正宗サア何うぞ此方へお入り下さい 喜左是れは先生
を自身にお立出で下さつては恐れ入りませう 喜左是れは先生
庭口の方から……と云ふのでそれから庭の切戸を開けて庭内
へ通し縁側へ廻り出す 喜左何うかモウお構ひなされは困
ります其の中にお茶煙草盆菓子と馴れ出し 正宗何かに用で
…… 喜左さて外のことでもございませぬが私共は故郷勢州
桑名へ今度引移ることになり今日限り當國を引拂ひます付き
ましては此處に金子百兩持参いたしました是れは太郎村正が

正 村 刀 名

一人前になりませうまでの小遣の足其の外のことにお預かり
下さいませうやう 正宗ア、左様でございませうか委細承知いた
しました併し相對でお預かり申すと云ふのも如何でござるか
ら村正を一す呼びませう…… 正方や一寸村正を呼んで参るや
うに…… 正方へ…… オイ仙吾さん先生が呼んでござる
村正ア、左様で…… お呼びなさいましたか 正宗オウ村正今
是れく 斯うく 云ふと雨親のお言葉依つて百兩のお金はお
前の見てゐる所で確かにお預かり申す入用の時は何時にても
お前に渡すから其の積りで殊に雨親は此度故郷へ歸つてお
前が一人前になつて来るまで神佛を祈つて待つてゐると云ふ
から能く心を忽せにせず一層精を出さなければならぬ 村
有難いこととございませうそれでは雨親様は故郷桑名へお引
取りになりませうか何だか知りませぬがお構ひかしいこととござ

正 村 刀 名

いまずと親孝行の村正がホロリと落す一竿、兩親も共に涙を溢してをりまするのには是れ親子の情でございませう正宗も其の心中を察しましたたが故と笑つて 正宗兩親に別れるからと言つて千里万里の遠方へ行くのではないから決して力を落すやうなことがあつてはならぬ、サア何しろ旅立のこと何にもござらぬが……と有合の酒肴を出して馳走をするやがて吸乞ひをして喜左衛門夫婦は立出でましたさて斯うなると雪の下の在にはモウ兩親はぬない桑名に行つたと思ふから村正は一層心に緩みがない然るに師匠正宗は村正の様子を見るに性來短氣で何りも鍛へる刀が総て何となく殺氣を含んでをりますから大きに心配を致し性來短氣の氣質があることゝは知つてをれども直るであらうと折々は物に托せて異見を申すのだが本人の腹の中にはまだ染みないと思つてをりますと思つてをりましたが

正 村 刀 名

る夜のこの村正を自分の居室に呼んで懸篋に異見を致した其の當座は用ひてゐるが如何なる次第かモウ三日も経ちますると元どの氣質が現はれるやうな有様是れはいかぬ何うしたら宜からうかと頻りに正宗は胸を痛めてゐた頃しも彌生の三月花の盛り正宗は團九郎正親喜惣太正吉藤九郎正兼仙吾村正彦四郎貞宗等を連れて吸筒を持ちながら相摸川の邊をブラ

歩きの櫻持、道よけて女中の花見遊しけり
誠は斯う云ふ所へ参りますると櫻花を見るは二の次花見と云ふは表向きで向ふから美しい女でも参りますと突當つて見たり或は頭の香ひでも嗅いで喜こんだり酒を飲んでブツツと言ふのが多い歸つて来まして ○何うだつたい櫻花はスツカッ、咲いたか △俺は櫻花を見て来るのを忘れたなと云ふのが

正 村 刀 名

あります。然るに今日は相模川の邊りへ餘り人通りのないのは
空はドンコロとした花曇り。櫻花は咲きも揃はず散りも始めぬ
と云ふ丁度見頃でございます。此邊で一杯やろうと弟子を相手
に正宗は酒を飲みながら生鱈を裂いては之れを肴にしてゐる
正宗時に今日は私がお前方に此の相模川の水の様子を話して
聞かせよう。元來相模鍛冶の元祖は一同も知らるゝ通り備前よ
り出でたる三郎國宗と云ふお方が此の國に來つて刀鍛冶を開
きたるもので我々の代に至るまで此の人を神の如くに心得てを
る。そこで此の相模川の水ぐらゐる柔らかにして穏やかなるもの
は他國にない水と金と鍛へる者の心が天地陰陽の道理に合つ
て穩やかに鍛つたから名作も出来るそれが一ツ足らないことが
あつても其の刀には狂ひが出来るものだと言ひつゝ村正の顔
を見たのは短氣を憤めと云ふ。誠ならんやがて正宗は己れの脇

正 村 刀 名

差の鞘をスラリと拂つて水下的の方へ之れを立て川上の方へ
形を向けそれより正宗は一町ばかり川上の方へ廻つて用意の
白紙を一枚づゝ順に流し置した一同の弟子は瞬きもせずに見
てをりますと其の流したる紙が又形の一寸ばかり向ひまで來
ると屹度左方か右方へ避けて靜かに流れる一同思はず手を叩
いて恐れ入つたと感服をする。正宗サアお前方のも一つ試し
て見なさいと許しを受けたから門弟達は大きに喜こんで思ひ
兼、眞宗等のは正宗の如くに紙を流すとスツツを皆な紙の方で
左方か右方の方へ避けて流れる然るに村正の刀に向つて來る
紙は少しも避けることなくして又形に當つて二つに切れて流
れる其の様子を見てゾツとする程。正宗は腹の中で驚きました
此の氣風ある時は血を見ぬ中は鞘に収まらぬ形がある罪無き

正 村 刀 名

人の命をやたらに断つ爲の刀にあらず、村正の鍛つ刀は
刃なり何うかしてあの氣質を直してやりたいと思つたが此處
で言ふのは悪しかりなると考へたから其の場は共に騒ぎ笑
ひ興じて面白可笑しく遊び暮し夕景に相成つて源氏山の屋敷
へ歸りました一同は晝の疲勞で皆な能く寐込んでゐる深夜に
及んで正宗は離坐敷へ村正を呼寄せ 正宗「さて村正今日相模
川で一同の刀を試した時お前の刀にばかりは流した紙が向つ
て来て濡紙が眞二つに切れたので實に私は驚いた是れは今の
中にお前の心が温順にならぬと如何なる名刀を鍛へても可惜
世の中に害をなしてお前の鍛つたものは自然と用ひられない
やうになれば勞して功なし師匠は親の心になり弟子は子の心
になつて折角覺えた此の職業も終には水の泡となる殊に兩親
に早く安樂をさせたいと學んでゐるに値かのことより破れを

正 村 刀 名

生じたらば何ぞ致す決してお前を惜いと思ふ譯ではないが何
うも私の考へでは手許に置いてはお前の殺氣が抜けぬ程に今
改ためて此所で勘當いたすから是れから三年の間諸國を廻り
お前の心の殺氣が抜けたことならば元どの如くに此の相州鎌
倉表に来るべし其の時又改めて師弟の約束を結ぶことに致さ
う決して一生の勘當と申す次第ではなから左様心得るやう
に是れは兩親が國許へ出立の砌り私に預けて参つた金子百兩
之れはお前に渡すから……」と涙片手に師匠正宗が懇切に申し
て呉れる之れを承たまはつて村正は如何に異亂な氣質でも弟
子思ひの師匠正宗が涙を落して申す有様に暫時言葉もなく整
俯向いて控えました

名 刀 村 正

毎度村正のお話を致しますと血を見ぬ中は鞘に納まらぬなど
申しますが敢てそれ程の悪剣でもございませぬは人の言傳へで
兎角針程のことも棒程に申しますから多くは人の言傳へで
さいますなれども徳川時代に於きまして村正の刀見當り候節
は炭火を以つて焼く候事是れは備かにお違がございませ
た此の故は家康公の父君廣忠公は御家臣の爲に計らず村正の
刀で撃たれずした又大坂の合戦の前に眞田大助幸泰が駿府の
お城へ親幸村の使として家康公にお目通りを致す際に八寸三
分の白鞘の懐剣を以つてお手向ひ致しました其の節左
の無名指へ微傷を負つた時に本田佐渡守正信の長男太郎九及
び本多中務大輔忠勝の嫡子出雲守忠友と云ふ豪勇の人が出で
組伏せましたけれども眞田大助は少年でございませぬ故寛
仁大度ので沙汰を以つて其の罪を問はず其の儘大坂城へ還し

名 刀 村 正

ました是れ家康公の村正の難と申傳へてをります其の外は
享保歴代江戸吉原町に於て佐野の邊の絹賣佐野屋次郎左衛門
と申します者が百人斬を致し名奉行大岡忠相殿のお調べの上
お處刑を仰付られました其の外に至つては大九屋騷動など
云ふことがございませぬ僅かな騷動でも無銘の力が落ちてゐれ
ば大方は村正の作りたるものならんとして何も心得ざる人が唱
へまするのは甚だ村正に取りまして遺憾なことでもございませ
文晁は此の講談を致しますに付ても村正を褒めるの最負にす
るのと申す譯ではございませぬが全く村正が練へましたるも
ので生命を落した者は初代村正一人でございまして二代の村
正からは頗る名作物であつて心得のお方は二代の村正と云ふ
と喜んで大金を出して求めます位俗に言ふ生物知りの人があ
つて初代も二代も三代も九代まで續きました村正を皆な血を

正 村 刀 名

見ぬ中は鞘へ納まらぬと申傳へましたのは誠に歎かほしいこと
とでございませう去れば村正は未だ二十代の時に將來見込の
る者でございませうから師の正宗が三年の間諸國を修業して
社佛閣へ参詣をなし其方の身体にある殺氣を脱くやうにして
能く己れの氣風を練つて其の時鍛上げたる中に一口なりとも
殺氣の脱けたるを証として改めて勘當を許す是れ其方の爲を
思ふ所である」と師の正宗が涙を流して申しませうから村正も
大きに喜び此の上は如何にもお師匠様のお思召に従ひ私の有
つて生れた性質とは申しながら殺氣の脱けませうやうに己れ
より心を柔らげ好い刀を鍛へるやうに致しませう 正宗然らば
明日とは言はず今宵の中に立出を致す方が却つて人目に掛ら
ぬで宜しからう 村正有難いこととございませう然らば左様仕
つりませうと茲で支度を致して源氏山の屋敷を立出る戸口を開

正 村 刀 名

いて長者の正宗が送り呉れるは師弟の情愛斯くありたきこと
でございませう 村正それではお師匠様貴所も御壯健でわらつ
しやいませう 正宗其方も道中水當りなごのなきやう所持の薬
も隠してはならぬ宿屋へは早く泊りて朝は大陽のお上りにな
り世間の人も出入りをする頃より立出をするやう初めての旅
故心着けの爲に申して置く 村正有難うございませうそれでは
お師匠様を機嫌宜しくと村正は立去りました正宗は其の儘居
間に道入つて寮で仕舞ふ村正は鎌倉の地を跡に致し是れより
都に上つて諸神諸佛を祈り何卒心を静かに納めて好き刀を打
上げお師匠様の心を休めたいと足を早めて参りませう折しも中
仙道へ掛りませうたが何しろ初旅のこととあるから少し行つて
は道を聞き名所舊跡のある所は残る方なく見物いたし追々参
ると岩山ばかりの所で道が頗る難儀でございませうと申しませう

名 刃 村 正

機曾か石にトンと蹴きました時に急に差込が来まして胸を押へ齒を咬締つて耐へてをりましたか餘程の若痛懐中に薬があるかと搜つて見ればお師匠様の言葉が無にした譯ではないけれども生憎薬は絶して仕舞ひ向ふにある清水を飲まうと思ふても其處まで参ることも出来ず如何はせんと躊躇折しも村人に見えまして三四人鑿鉢を持つて其處を通り掛り 甲其處にゐるのは旅人ぢやアねエカシツカリさつせエ急病でも起つたのか幸ひ斯う云ふ時に用ふべエと思つて熊膽を持つてゐたのサア之れを飲まつせエと取出して深切にも口の中へ入れて呉れる一人は手拭を清水に濡して其の水を口へ入れて呉れる一人は後へ廻つて頻りに背中を撫で、呉れます世の俗態にも申します通り一に看病二に薬向でも看病と云ふことが専一でございます通り掛りの百姓が深切に世話をして呉れましたので

名 刀 村 正

急病と云ふものは一時強うございませすが復り方は早いもので村正はホツと一息吐きまして有難うございませお陰様で宜い鹽梅に復りました一本此處は何と申す所でございませ 甲イヤ旅のお方も復んなすつたかそれは結構なことだ此處は御嶽の山中だ 村正「それでは此處が中仙道有名の御嶽山でございませるか 乙「お前は一体何處の人だい 村正「私は鎌倉から参りました 乙「ア、さうかい京都へでも行かつしやるのか 村正「左様でございませ少し心願がありまして都へ上る道中差込が發つて思はず厄介になりました 甲「何しろ旅馳れねエ者が斯う云ふ山中を通るのはなか、難儀なもの土地の者でさへ三度に一度は随分足を痛めることがある御地頭様へ願つても少し道巾を擴げて貰はうと思つてゐる位、何しろもう燈火の点き際だし是れから先へ行くと思つてゐる位、何しろもう燈火の

名 刀 村 正

エ所で掃はなければ餘まり寒くない時分のことだから私が所へ来て泊らつしたらせうだ。村正「それは誠に之深切に有難うございませう左様ならせうか厄介になりませう。甲「それぢやア斯う来さつせ」と先へ立つたのは此の中の頭立つた者と見え老人が深切に案内して呉れる村正は跡に跟いて行つたが成程渡る世間に入鬼はないと言ふが誠に有難いものだ道中で淋しいものは夕方山中で入相の鐘の音を聞くこと長旅の錢無しなどは誠に心細いもので。甲「サア客人此處が私の家だ其の前の流れで足を洗つて上らつせ」。村正「有難うございませうと村正は足を洗つて上へ登り。村正「此方様は石切でもなさいますか。甲「ア俺が家は石切で太惣次と云ふ者此の村數は深山もねエが五村ばかりに分れてゐて百三四十軒ばかりの家數だ。村正「さうでございませうか誠に村方もお静のやうで。太惣

名 刀 村 正

ア「もう此の御嶽は餘り他所と交際をする者がねエ其の代り旨エものを喰べやうと思つても遠くへ行かなければ買ふことも出来ねエだから日待の時や何かは若衆を頼んで宿へ行つて買つて来るだ其處へ太惣次の女房のおもと云ふのが出て参り村正に挨拶をする。太惣「おもとや是れは旅のお客で鎌倉の方から来さしつたお方だ先刻山中で急病を發してゐたから俺が能腕を呑まして介抱をして家の若い者も色々世話をやいた隣村の仁助も骨を折つたから後でちよつくり一杯呑ましてやつて呉んな。村正「お内儀さん種々此方の親方様にお世話になりまして有難うございませう。女房「どう致しまして此様な穢ない所で不味いもので宜しければ之心配なく何日までお泊んなすつて下さい。村正「有難うございませう。太惣「サア客人お前は底足を出しなすつたナ胡坐をかきなせ。村正「それで

正 村 刀 名

はお許しを願ひます、どうも痛くつてなりませぬ。太惣「ア、さ
うだらう初めの旅ぢやア無理もない底足を癒すには煙草の
吹壳を粘飯で練つて紙に延ばして付けるのが宜い阿、ア、後
で客人に拵へて上げな良い酒ぢやアねエが一杯呑ませエ」と主
人は誠に氣散じの者で其の夜は種々款待を受けて村正は一
を借りて寝て仕舞ひました所が翌日になると悉くの大熱で起
る。ことが出来ぬ。太惣「是はえらい熱が出てゐるから速も立
つことは出来ぬ。お前を世話アすると云ふのも何かの縁だか
ら決して心配をするには及ばない」と夫婦は深切に世話をし
呉れる。遂に三十日と云ふもの枕を上げることが出来ぬ。漸や
く三十五日目に病氣も癒つたから村正は太惣次夫婦に向つて
どうもとんだ厄介になりお蔭様で漸やく癒りました。太惣「
それは宜い鹽梅だつたもう大丈夫かな。村正「ハ、有難うござ

正 村 刀 名

いませすもうスツカリ宜いやうで。太惣「それでは湯が立つてゐ
るから一風呂這入んなさい」とそこで村正は湯へ這入つて身軀を
奇麗に致して坐敷へ來ると。太惣「何にもねエが床上げの祝だ
俺も相手をするから一杯呑みなせエ。村正「有難うございます
太惣「今日は此の村方で若衆が踊を催して見物をさせると云ふ
ことだ。村方に天王祭禮があるから行つて見たらどうだネ。村
それでは仰に従つて見物をして参りませう」と病氣舉句のこと
でございませすから竹の杖を突きながら村正が來つて見ると素
盃を祀つてあると見えてなかくの賑ひ夏の祭禮は何處で
も一般に天の荒神をお祭り申してあるやうで村方の若い衆が
種々趣向をして踊などを致す。村正は彼方此方見物をして日の
暮方に戻つて参り其の夜は寝て仕舞ふ翌朝のことチ「ア、
吹子の音が致しますのは若い者が打鐘を構いてゐるので、せん

止 村 刀 名

な石屋さんでも早朝職に掛る前に打金の刀の捲れてゐるのを
若い者が一生懸命吹子へ掛けて真赤に先を焼き金敷の上で刀
先を固め之れを袋の中へ入れてそれ
れを見てをりました村正が「モシ若い衆さん 職業に出掛けます、そ
だいかい村正私がそれを拵へて上げるからお貸しなさい 若者」
さうかいぢやアどうかお願申さう「是れは刀を鍛へる人がやる
のと石屋さんが我流でやるのとは大きに違ひます早く言ふと
急所を能く打つと云ふことで十折の槌を五つで十だけの仕事
が出来ると云ふのは其の手がちやんと極つてゐるから無駄が
ない 村正「サア之れをお持ちなさい」若い衆が仕事から歸つて
来て「お客さんお前が堅めて呉れたのはどんな堅いものでも少
つとも先が捲れねエどうも有難い」と禮を言ふ或は金を買つて
研付けて研法を計り刀を眼へるやうに打上げてそれを研付け柄

正 村 刀 名

を穿けて親方へ渡す親方の太惣次は手を打つて喜びそれぢや
アお前さんは鍛冶屋さんか宜い人が家へ泊つて呉れた石屋の
家には鍛冶屋さんが泊つて呉れるなんて此様な結構なことは
ねエ是れからは月に幾許と云ふ給金を極めて上げるから當分
は悠くり足を止めてゐて呉んなさいと言ふのも深切に申して
呉れるのでございませうから村正も厭と云ふ譯にいさせぬ病
中を助けて呉れた深切は一通りのことでないから此處に暫時
足を止めて毎日のやうに手助けをしてをりませうと此の四
五日は何となく材方が物淋しうございませう或る一日村の者が
太惣次の家の奥の一間へ集まつて参る「イヤ大きに苦勞さん
でどうもほんでもねエことかオッ初まつて弱つた此様なこ
どが長く續いた日には仕様がねエ」
餅し酒を飲んで若者や何か酔はらつたりなぞすると間違

名 刀 村 正

この種だから酒は後のことにしやう
に庄家様御苦勞でございませう
坐つたのが此の村の床家其の外
人に見える懸てそれへ席へ着くと
ねえが一同聞いて下さい三年前
が出ると云ふことだが此頃では
土地の者が賊に困つて御領主様
てござつて今は不在だ留守番を
には村方の者で五十歳を止り十
しると云ふこと弓矢をお貸下す
是れから籤を抽くから當り籤を取
て行くこと云ふことにしやうどう
賢ひてモ ○宜しうございませう
庄家さんの言ふ通り委細心得

名 刀 村 正

ました 庄家「それでは此處に籤を拵へたから抽いて呉んなさ
い村正は其の様子を見てゐたが何の騒動だかと袂の蔭で聞い
てをりました 庄家「サアそれへ一本づゝ籤を抽きなさい」
殘らず抽終る 庄家「そこで白紙を抽いた者は別に出来るには及
ばねえ中に一本丸を付けて置いて置いた籤を抽いたのが當りだから
其の積りでゐて下さい」と懸て庄家始め籤を開いて見ると隅の
方に犯然してゐた一人の老人「私が當りました 庄家「ヤア誰か
と思つたら新田の孫兵衛殿か氣の毒だが仕方ねえ當籤だか
ら出て下せえ 孫兵「宜うございませう當つて見れば仕方がない
から出てくることに致します 庄家「何しろ今日より十日のお日延
を願つて置いたから其の積りで支度をして下せえ 孫兵「宜う
ございませうけれども私の身軀に若し過失でもあつたらお願ひ
でございませうからどうか跡の所を何分お願ひ申します 庄家「宜

名 刀 村 止

いとも其様なことは心配しぬエでも後のことは俺が見廻つて
やるから孫兵どうぞお願申します酒肴を山のやうに出
したが芽出たいことなら我勝に喰もするが村方新田の孫兵衛
と云ふ極く穩當な人が鐵に當つたのでございますから一同の
箸は氣の毒に思つて一人立ち二人立ち果は残らず歸つて仕舞
ひました石屋の太惣次も腕組をじてどうも孫兵衛さん賊に氣
の毒なことだが仕方かねエどうか心を丈夫にして出掛けなさ
い孫兵衛ハイ有難うございます私のやうな年寄が行つたつて
何の役にも立たねエ何しろ岩間或は崖淵に人間の骨があつた
の何のと聞けば餘まり宜い心持はしねエ考へて見ると私も前
世の罪がまだ滅びぬエのか跡へ跡るのは老婆一人年を老つて
も子供と云ふ者はねエから賊に心配で太惣ナニ其様なこと
を氣に掛けずとも跡は庄家さんが宜いやうにするから心配を

三十一

名 刀 村 正

しなさんなと慰さめてゐる所へ間の襖をガラリと開けて村正
が其處へ立出でました是れより村正が如何なることを致すか
一寸息吐いて申上げます

第 四 席

間の襖を開き村正は心靜かに立出で、下手へ下つて座りまし
た村正「只今何かとお話はお次席で残らず聞いてをりまして
實にお察し申しませす一體其の怪物と申すのは如何なるもので
ございませるか孫兵衛イヤ能く尋ねて呉れましたそれは貌
と云ふ黙ださうで動ともすると人間に害をすると云ふこと俺
みたいな年を老つた者に退治が出来れば宜いかと思ふでかす
村正「それでは大方人なき所に匿れてゐて人間が山中へ來た所
を見て害をするに違ひありませんまい何を匿さう私も心願あ

五十一

名 刀 村 正

て此度都へ登り自分の願を立てやうと思ふので其の道すがら
當地へ参り交した私が一心込めて一口の刀を賣方に鍛へて
上げさせ五日十日の猶豫があるると云ふから向ふ七日の間に
屹度鍛へて上げます其の切味は如何なる岩金と雖も切れぬも
のはないと自分から申すは高慢のやうなれどもそれを以て其
の怪物を退治なさるが宜い明日と言はず今日より私が取掛つ
て鍛へて上げやう之れを聞いて孫兵衛涙を流し孫兵衛ハヤ有
難いことでございますお前様が深切是れも日頃念じる神様の
お蔭何卒何分お頼み申しますと喜こんで孫兵衛は立歸る後へ
残つた家の主人の太惣次客人お前様は誠に深切だ私の家の道
具の類を拵へて呉れるので大抵様子も解つたが定めてお前様
の鍛つた物は見事であらう斯う云ふ山中で切味の宜い太刀を
求めやうとしても中々容易く手に道入るものではない幸ひ私

名 刀 村 正

の家にも風櫃金敷一通りあるから何れぞ孫兵衛爺に拵へてや
つて呉んなさい村正は素裸体になり滑水の流れてゐる所へ行
つて數十杯の水を浴び一心不乱に念じます伊勢の桑名の觀
世音菩薩一體村正と云ふ人は大層神佛を信仰する人でござい
ますそれをから体を拭いて細工場は誰にも見せないやうに十分
圍ひを致し此の中へ這入つて向ふ七日七晩日夜目も休めず遠
に銀へました一口は長さ一尺三寸自身に砥ぎを掛け鞘も拵へ
銀は麻糸を以てしかと巻上げそれを待つて石屋の若い者の次
郎助と云ふ者を案内と致してやつて参りましたは新田の孫兵
衛門口村正お許し下さい孫兵衛是れはお入來なさい……老
婆さんあの方が石屋にゐさつしやる鎌倉のお客人老婆さ
うでございますか……宜うこそお入來でございませう此様な穢
陋い茅屋でさぞお氣味が悪うございませうが何卒此方へか這

名 刀 村 正

入りください。村正「それでは免を蒙ります時、孫兵衛殿何時ぞやお約束の一口漸々出来たし、砥も掛け拵へも私の手細工何卒之れを當日はお用ゐる下さるやう、孫兵衛何うも難有うございませぬ。貧しく暮してをりませぬければ、幾らと言つて貴方に價も差上げられるのでございませぬが……村正「是れはしたり其の價を賣りたいからとて、私は拵へたのではございませぬ。さう云ふ御心配なく、私の寸志を受納下されば難有いことで、孫それは何うも忝けないことで、貴方が一心込めて鍛へて下さつた此の賜物必ず怪物は退治して来りませう。村正「長いお話は無用のことをそれなら是れでお別れ申します。随分心を丈夫にしてか出でなさるやうに」と懇ろに申置いて、次郎助を連れて村正は太物次の家に歸つて来た。孫兵衛夫婦は大きに喜び、其の翌日に相成つて、孫兵衛「それでは老婆さん、私は是れから出立して山

名 刀 村 正

の様子を見定め、若し其の悪魔が出たら、此方の命を取られるまでも必ず退治して仕舞ふ考へ、後の所は何分願ひと言ひつゝ、やがて支度を致し、門邊に出で、夫の孫兵衛見送る妻は涙を流し、それでは爺様よく氣を注げて……孫兵衛「ア、宜ども、老婆、握飯を忘れてはならない」と老婆が出す包みを腰に附けお役人から貰つた白木の弓に、鷲の風切の羽を以て矧ぎましたる矢を、負ふて村正の鍛へて呉れた一尺三寸の袴、鞘作りになつてゐる一刀を帯して、麻の草鞋を履きしめつゝ、早や御嶽の山の入口より追々奥深く登り、ました一日は別段、是れぞと云つて、何も見當らない。鹿追ふ狩人は山を見ずと云ふが、罪もない兎や狐狸の類を捕つたれば、とて何の手柄になるものか。山獵人は斯う云ふ小さなものを撃つて、里へ出て賣代なし、今日を送る其の殺生も業とあれば、仕方がないが、俺は村方の爲めに禍ひをする悪魔を索

正 村 刀 名

すのだがさても何處に匿れてゐることだ。と足にまかせて山中を索し歩いたが又一日も盡きて仕舞ひ既に三日三夜相經ちなした。丁度四日目の夕方用意の握飯を取出しそれを食へながら瓢の中へ入れて參つた。水をゴツクリ一口飲み今日もモツ夕暮になつたが何しろ恐ろしい山中土地に住んでゐても此の奥へは這入つたことがない。是れは大層眠くなつた。とモツ三日も山中に這入つてをりすから度胸が据つた。孫兵衛爺片側へ弓矢を這いて岩の間に几り掛かり夜露に打たれてはなるまいと、それでは老人若い者と違つて萬事心得てをりすから木の枝の垂れてゐる其の下へ座を占めたが勞れがあるから宜い心持に口くど間眠む未だ一寐入りもやらぬ中に何となく寐が急に暖かくなつて來ましたから如何なることかと向ふを見れば、一ツと云ふ山風が吹き來る様子。ハテナと尙ほも臆を定めて見

正 村 刀 名

てあれば何やら地震さが致して次第に此方へ來る様子。見ると總体眞白の毛で顔は赤く口は耳元まで裂け銀鍔を研ぎすまし。たと思ふやうな牙を現はし。ハツと口を開いて火炎のやうな舌を吐き出し五間許り向ひから今や孫兵衛爺を喰はんと飛掛らんとする彼の時遅く此の時早く側にあつたる白木の弓にカツキリ番へた一矢狙ひも定めず切つて放せば其の矢は怪物の背中を微觸つて彼方へ落ちた。尙ほ二の矢を番へて射らんとする折しも一陣の怪風吹き來つて孫兵衛爺の眼口に砂塵が這入つた。からメヤくと後とへ下る怪物は此の時孫兵衛に飛掛らうとする。とアラ不思議や人の一心石に立つ矢の例もあるが孫兵衛の帯してゐる村正の銀へたる一刀鞘よりハツと抜け出で。心籠めて鎌へた刀だから自から魂が這入つてゐると見え。心籠めて鎌へた刀だから自から魂が這入つてゐると見え。

正 村 刃 名

石荒き怪物も急所を突かれたから堪らない苦しさ疑を發して
地震き打つて其處へ倒れた孫兵衛は怪物の勢ひに驚いて氣絶
をして仕舞ました夜はガラリと明けたが誰一人あつて還入つ
て来る物もない茲に當國の領主御嶽左衛門尉時義と云ふ御方
は都へ参りまして將軍家にて對面をして政治向のことを承
まはり用濟みに相成つたによつて道中別段急ぎもせず漸やく
自分の領分へ還入りましたか途中で日が暮れて仕舞ひ家臣が
申すには庄家の宅にお入來になつて今晚はお寐みなされては
如何でござる」と云ふと豪毅無双の時義殿莞爾か笑ひなされ
時義其方等の申すことは其の意を得ざることである深夜に及
んで山中を往來いたし或は人なき所を通るのは却て面白いも
のぢや殊に余が領分を歩くのに夜中に往來いたしたとて何も
不都合がない大將が斯う云ふ豪毅な人でございますから其の

正 村 刃 名

家來の可權平太同じく權平次の兄弟大久手の十郎並に三郎同
じく四郎是れは皆御嶽の一族で豪勇な人々天下太平の時分に
はお武家様方が道中をする時何れも腰の物には柔革の革袋を
掛けたり或は柄袋を掛けて歩きましたか亂國の時僅かな道
を歩くのでも始終刀などは扱けるやうに用意をしてゐる國が
亂れて諸國に合戦止む時がないなど云ふ頃は寐るのにも枕
邊へ弓矢を置きなご致したものでございますそれ故此の御嶽
の家來などは戦はなくても皆々武具で鉢をしかと固めてをり
ます夜が明けて丁度五ツ頃に相成り最も道中での意の饅飯な
どを皆食したから腹の空ることはない追々お出でになると馬
上にゐられる御嶽左衛門尉時義殿道中の勞れで少し眠氣が差
し手綱を睨と押へ鞍は忽せにしませぬから少し位寝つても馬
の口を取つてゐる者があるから大丈夫でございます雑兵等は

正 村 刀 名

色々々雑談をなし笑い興じて歩いて参る其の聲に左衛門尉殿目
を覺し時義コレ此處は何と申す所だ家來此處はどの頃分中
御嶽の奥山でございます時義左様か天氣麗かなる時には斯
様な處で狩を致したらは宜いであらう家來御意にございま
す此頃にお催しおつて然るべく心得ます左衛門尉時義殿が馬
の上から向ふを見ますと何やら怪しき獸の脇腹に一尺以上の
刀が突立つてあり眼を見開き血を注いで其所に苦んでゐる様
子固より勇氣盛な時義殿ヒラリ馬からお降りなされ家來より
先に立つて馳けてお出でになり腰に帶した大和鍛冶の鎌へま
したる一刀抜く手も見せず突然怪物の首を見事に斬つて落し
時義是は能き護物を得た併し何者が斯く刀を刺して仕留めた
るか權平太十郎其邊を見届けいハツと兩人四邊を尋ねて参り
兩人恐れ乍ら御大將へ申上げますあの處に五十路餘りの老人

正 村 刀 名

が一人絶氣いたしてをります様子時義其者は山嶽人ならん
早々介抱いたして取らせろ兩人畏こまりましてございます
と兩人再び其處へ馳付けて参り權平コレそれなる老人腕と
心を持って此處へ御出でなされしは當國のこの領主左衛門尉時義
殿にて渡らせられるしつかり氣を持って孫兵衛は漸やく氣が付
いて四邊を見廻し孫兵衛是れはどの重役様方であらうしやいま
するか私はモウ腰が抜けてしまひまして迎も此の山は下りら
れませぬと思ふ位十郎其方は如何致して斯く山奥へ這入つ
て参つた孫兵衛ハイそれでは一通り申上げますがご領主様か
都へ御出でになつた後此の山奥に怪物が出て人間を喰ひ殺し
ますに就て其の退治方をお留守居方へ願ひを上げました所が
人数は急に揃はぬし殊に御大將のをらざる時に漫りに山を狩
立てることもならぬから其方等の中で籤抽でもして罷り出る

正 村 刃 名

どの仰せで庄家の源藤木も大きに心配を致し村中寄つて鎮を
引きました所が私が當りましてそれ故此の山奥に参つて到頭
斯う云ふ獸に出會ひました土地の者往來の者が尋て難儀を
してゐた斯う云ふ怪物を仕留めませぬれば私が命を捨てました
所で少しも惜いことはございませぬ是れも領主様へ萬分が
一のと思返し何うかご重役様から宜して御大将へ仰せ上げ下
さいますやう願ひます 權平ハ、ア左様であつたか………恐れ
ながら是はご領分中御嶽村新田の孫兵衛と申す豫て私等も聞
及ぶ小前の者先達てより此の山中に怪物出でると聞及んでを
りましたが云々斯様くいたして懸取つたさうでございます
之れを聞いて左衛門尉時義國ナニ領主の爲めに小前の者が命
を捨てても決して惜しくないと申すか余は小身物だが領分に
主める民は余に服従して領分の難儀を辭めやうとする志は感

正 村 刃 名

服のこと譽め置くであらう其處へ庄家の源藤木は庄五庄六と
云ふ若い者頭を始め各々機々の得物を押取り十四五人彼方此
方を見廻りながら登つて來ると此處に御岳左衛門尉様が床几
に腰を掛け孫兵衛爺が其の前に何か申上げてゐる様子傍らに
見ると恐ろしい大きな怪物が首と胴とが離れて倒れてゐる左
衛門尉殿は三尺餘の太刀を右の手に提けておゐる有様
なごは物凄くぞ見へたるから庄屋を始め大地へ座つて頭を下
げる大久手十郎早くも之れを見付け 十郎其方等は何者であ
るか 源藤木ハ、私共は庄屋源藤木始め村内の若い者孫兵衛の
様子を見届けに参りました 十郎ハ、孫兵衛が老人のこと
であるから様子を見届けに参つたと申すか庄屋の志し斯くあ
りたきものである然るに時義殿のお目に付いたのは此の怪物
の脇腹へ深く突通つてゐる一刀之れを抜いて御覽になると中

正 村 刃 名

この名刀らしい併しまだ拵へたばかりの様子も打つてない
けれども新刀とは見えない刃先を見れば鬚の毛で突いた程の
傷もございませぬ 時義コレ孫兵衛とやら其方が所持いたし
てをつたる此の一刀は如何いたしたのだ 孫兵衛御意にござい
ます是は村内の石切太惣次方に當時参つてゐる鎌倉の客人私
が山へ遁入つて怪物を退治いたすと云ふことを聞き可哀想な
ことだと申されて拵へて呉れました刀でございませぬ 時義ナ
鎌倉から参つてをる者が鍛へて其方に送つて寄越したか如
何なる人物である 孫兵衛ツイ名前は尋ねませぬがまだ年若で
何でも鍛治屋だらうと思ひます 時義して其方が此の刀を以
つて怪物を突いたのか 孫兵衛何う仕つりましてお彼人さまか
ら弓矢を拜借して出て参り始めに放した矢は怪物の背中を貫
つて彼方へ飛び二の矢を放たうとする時に堅脇が飛掛つて来

正 村 刀 名

る勢ひに眼が暗んで倒れたぎり後のことは何にも存じませぬ
併し外に人も来る氣遣もありませぬから大方私が帯してゐた
刀が自然に抜けて突刺つたものと見えます 時義然らば其の
鍛へたる者の一心が籠つて其方を助ける爲めに自然と拔出で
たものと見える其者を余が館へ同道いたせ思賞は厚く取らせ
る……コレ此の怪物は早々余が館の庭内へ引入れて且是れな
る一刀は余が申受け孫兵衛には相當の賞を取らせる、イヤ馬引
けと御意あつて御嶽左衛門時義殿馬に跨がり郎党を率ひて御
館へお歸りになる改めて孫兵衛に銀二十枚を賜はり庄家源藏
太へ銀五枚其の外者には銀二枚づゝ下し置かれた、そこで孫
兵衛は石屋太惣次方へ参り村正に面會して「賊に有難いことで
ございませぬ前様が鍛つて下さつた刀で怪物を退治致し斯う
云々でございませぬ前様がお前様を同道しると云ふことだからで

名 月 村 正

昔勞ながら一掃に行つて下さうと云ふ之れを聞いて村正大に喜び借こそ我一心を神も感應ましうたか是れにて表氣も大方抜けたであらうまだ鎌倉を出でてより一年とは相成らぬが、師の恩は有難きことと思ひうゝ是れから孫兵衛と同道いたして早くも来る御邊左衛門尉時義の館こゝで村正が時義殿にお目通りをして一口の名作物を假へて御殿の子孫に遺すと云ふ村正御殿時義に對面の一席でございます

第 五 席

時に村正は御邊左衛門尉殿の前体へ罷出でか目通りを致す先づお盆を下し置かれさて時義殿のお尋ねに抑も世の中の悪魔を退治いたし強敵を斬断くものは日本國の太刀に如かず其方殿當國に參上て新たに假上げたる小刀を以つて勇猛なる

名 月 村 正

悪魔を退治せしめたる段天晴の至りである是れに依つて余が手づから其方へ褒美を遣はすであらう村正涙を流し有難く御禮を申上げ私如き小人の打ちましたる小刀を以つてご領分内に棲める悪魔を退治いたしたるは是れ偏へに諸天神の威應在ましたることにて之れあるべくと心得ます私の師は相摸の國の住人五郎正宗と申し世に名假治の聞えございまする者私其の末の弟子にして取るに足らざる者にございまするなれども師の高恩に依つて能く其の流儀を學び常に怠たらず秘を握りたりまするが其き刀劍を假へまする妙を用ることはまだ此の先き數十年相經ちませぬければなかつ其の極意を師の正宗は許しませず依つて國々を遍歴なし神社佛閣を參拜いたして我が心を練り名假治の名を取りたく是れに依つて圖らずも當國に罷越して一口の小刀を假上げた次第でございます餘

名 刀 村 正

るに今般お目通り仰付けられ斯く御褒美を頂戴いたしませる
こと偏へに私の子孫に至りませるまでの面目是れに過ぎず依
つて御大将へ一口の太刀を銀へて献上仕つりたく心得ます此
の時時殿大さにお喜びなされ何分願ひと御意あつて其の日
は夕景まで厚き御褒應に預かりて前を退きました是れより一
七日の間に一口の太刀を銀へて領主に献上いたしたる所之を
御藏丸と號け左衛門尉時義殿此の太刀を以つて毎度軍功を現
はしたと云ふそこで御時義殿より銀百枚を下し置かれ上々
の首尾にて村正の前を退き石屋太惣次の所へ歸つて四方八方
の物語りをなし此の銀子半分を出して一に通りならざる先
建てよりのお世話私も斯くの如く當國に於ては領主のお恩恵に
預かることは取分けて有難く是れ偏へにお前様の引立に依
る所ごまひます既いては私も心願のこととてささい升から

名 刀 村 正

れより當國を出立いたし國々の神社佛閣へもそれく参詣を
致さなければなりませぬ故孫兵衛殿初め村方の衆には種々お
世話を蒙りましたからどうか立養應をするに申すと大仰に聞
えませすが首途のしるしに酒宴を開き一同と一献汲んでお別
れを致したうござるから宜しくお前様からお計らひを願ひか
い太惣それはどうも村正さん宜い申しとだそれなら發途
を祝ふてお立ちになるが宜からうと茲で石屋の夫婦が先立つ
てまめしく萬事のことをして呉れる其の翌日は一日村方
一同の者を呼集りまして村正が養應を致し一同の者も心能く
馳走に預かり此度の有様御藏丸のことなど四が八方の話を致
し一同の者に暇乞を致した其の翌日御藏左衛門尉の館へ参つ
て御禮を申し愈々村正も當國を出立いたして是れより三十里
餘り参る間には別段にお話もなく中仙道高宮の里へ参りました

正 村 刀 名

此處はなかく、宿も奇麗な所軒も並んで人氣も温和、一軒の茶
屋へ腰を掛けまして、村正「老婆さんお茶をお呉んなさい、
お入來なさいまし今日は好いお天氣でございますお茶をお飲
んなさい、村正「何かお菓子を取つてお呉れ、老婆「ハイ食
うなものにはございませぬお菓子よりは却つて鹽煎餅の方が美
味うございます、村正「それではどうか鹽煎餅を少しばかり下
さい、老婆「畏まりましたと、婆さんはお盆の上に鹽煎餅を載せ
士瓶へ湯を注して其處へ持つて參る村正は煎餅を食ながら四
方の景色を眺め向はも過去未來のことを考へてゐたが時に妻
さん此處は大層軒並びも宜し誠に奇麗な宿場だ、老婆「ハイ此
頃漸やく此處等も賑らか開けて參りましたが以前は誠に詰ら
ない所でございました、村正「是れから向ふへ入ると何と云ふ
所で……、老婆「ハイ是から向ふは越川と云ふ所でございます

正 村 刀 名

村正「ハ、ア話に聞いてゐたが此の越川と云ふのは餘程大きな
川かな、老婆「ナ、太して大きい川と云ふではございませぬが
併し假治屋さんが此の川の水は金氣を假へるのに性が宜いと
言つて此頃此方へも刀を假へに人が越してお來でございま
す、村正「ハ、アさうかい、それは何と云ふ人だネ、老婆「左様で
ございます以前は泉州の産れだと思し、まして貴重と云ふ人が
此方の方へござつて其の人はもう年を老つてをります、村正の
資正と云ふ人が至つて親孝行で村方の人には可愛がられ金銀
を賣らず頼みに應じて品物の良いのを假へて呉れると云ふの
でイヤもう大變に評判の好いお方でございます、村正「ハ、ア
して其の越川と云ふ所まではどの位あるのです……、老婆「左様
でございます當所から二里程もございませうかと話をしてゐ
る所へ向ふから老婆さんが箱を背負つて參りまして「老婆さん

名 月 村 止

もラッロく仕舞つたら宜からう 老婆ア一今此のお客さん
が越川の里まで行かうと云ふのだが二里程もあるだらうネ
老婆イヤ老婆さんの言ふ通りお客さん先づ二里はございます
併しそれより遠くはございませぬ日一杯には樂でございます
まア御悠くお休みなさいまし 村正それは添けない之れは
少しばかりだが茶代に鳥目を其處へ差置き草鞋の紐を締
す 老婆此様にお預き申しちやア濟ませぬ 村正ナンが多
分のことは致さない大きにお世話に預かつた 老婆それでは
お客様お氣を着けて行らつしやい老人二人に致はりました如
く足早に道を急いで参りますと二里と云へば遠いように聞え
ますが旅を歩く人に言はせれば二里や三里は一す一二町歩く
やうな工合でなければ長の旅は出来ませぬ村正は越川と云ふ
のを目懸けて参りますと成程一つの川原へ出ました水は深山

名 刀 村 正

ないやうだが小さい川ではございませぬ別段人の往來しない
然るに上の方から來ました一人の若者小石を取つて袂へ入れ
又石を捨つては懐裡に入れなぞ致して四方を見廻はし物をも
言はずに越川へ既に飛込まうと致すから善か悪かは知らぬと
も人が死なうと云ふのは全くのこと處に死なうと云ふのは傾
城の口より外にはない依つて村正は物をも言はず突然其の若
い衆の帯際をシツカリ握り 村正「モンお若衆どう云ふ次第で
身を投げるか死なうと云ふ無分別を起しなさるか私ば今此處
へ通り掛りし旅の者人が身を投げやうと云ふ所を見れば知ら
ぬ顔をして通る譯にはいきませぬ悪いやうには致さぬから先
づ此の石に腰を掛けて一通り死ななければならぬ譯を聞かし
て下さい委細を聞いて道理至極成程死ななければならぬと
云ふことならばそれこそ私か突飛ばしても此の川へ身を投さ

名 刀 村 正

てて上げやう暇にはさへ死は一旦にして易く生は萬代にして得
難きものと云ふから心を静めて一通り話して聞かせなさい石
の若者は涙を拂つて有難いことでございますあかの他人様で
斯程に情深いお言葉を掛けて下さると云ふのはお禮の申さう
やうもございませぬ私は何を隠しませう此の在の仙石村と云
ふ所に住居いたしてをります以前は和泉の者でございまして
刀鍛冶資重が伴の資正と云ふ者でございます村正ナンド……
さてはお前さんが和泉國のお人で資重さんの伴の資正さん申
し遅れたが私は相模國源氏山に住居いたす五郎正宗の末の弟
子仙吾村正と申す者實は此の後の高宮の里で茶店の老人夫婦
から其方の親孝行と云ふことを聞いて誠々に結納なことに心組
切てお前さんに一目會つて行きたいと他人ではあるけれど
同業のことで見ればお尋申すも私の道中修業の一つと心得

名 刀 村 正

此の夕暮を迎へつゝ此處まで参つた所會ひないと思ふお前さ
んに出會つたのも何かの縁何故死なうとしなさるかせうか其
の譯を善惡に拘はらず聞かして下さい私も聞いた上からは何
とかで相談相手になりませんそれでは深切に從ひ私が死なな
い仰有るか資正それでは深切に從ひ私が死ななければなら
ないことを一通り申しますからせうぞお聞き下さいし鎌倉
の頼朝公時分より當國に程近き江州佐々木の先祖を祀りて
賀明神と申し當國より十里四方に住める鍛冶職は皆一口の刀
を納めることに昔から掟となつてをります然るに私も和泉國
の者ではございませぬが當國へ参つて住みますれば大張り難
明神様の氏子なるに依つて是非とも一口は納めたいと思つて
をりますするが三年續いて私は其の頼堂へ打つたる刀を上げる
こと叶はずと申すは京都の油小路の住人長兵衛財國重殿の爲

名 月 村 正

に上へ認めること出来ず其の譯は上の一上の二上の三外四十人と
口を領に付けて其の下へ名前を大きく書きまするそれが三年
續けて上の一を長谷部國重先生が取らるゝに付て常に残念に
思つてをります然るに忽々九月十五日其の當日に私の打つた
刀が上の一に上がることも出来なければもう當國に住んで
はをられませぬ土地の者の前も有り餘りに意氣地がないやう
で是れに依つて此頃親父の資重には小言を言はれ其方見たや
うな得鈍な者はない今年には備前國の住人孫左衛門尉兼光殿の
鑑定あつて尙ほ諸國より上ぼり來れる大勢の刀鍛冶の爲に笑
ひを受ければ彌々和泉鍛冶の恥入る所和泉鍛冶の元祖資重の
家も其方の代にて儲けるかと思へば實に残念に心得ると親父
が涙を流して私への小言私も今年には十八歳まだそれ程の腕前

名 刀 村 正

でもございませぬのにせうしたら宜からうと考へ今年も京都
の長兵衛尉に上の一を取られることかと思ひますと私も最早
生きてゐる譯にはなりませぬそれ故親父が他村へ用事に出ま
したのを見済し跡は五人ばかりの弟子がをりましたが其の間
を窺つて此處まで参り此の越川へ身を投げて死なうと云ふ私
の覺悟でございませぬ是れを聞いて村正は茶碗と打笑ひ「それは
誠に其方の心が狭いと云ふもの一年二年や損してもまだ今
年が三年目此の年打つていかなければ死んで仕舞ふと云ふの
も聞えな話だがまだ三度目に鍛へたるものを出さないのだか
ら上の一になるものかならぬものか分らずそれなのに短慮を
出すのはお前さんの心得違ひ意見をすする私もまだ三十歳にな
らない男だがお前さんより私は私先きに産れてゐるから鳥居
敷は幾らか滑つてゐると云ふもの決して産は言はない此の上

名 刀 村 正

は心を大丈夫にして天地の神に祈つて一口の刀を打上げるや
うさつしやい此の村正が向樋を致して一口打上げることにし
やう是れも何かの縁だからどうぞお前さんの家に案内をして
下さい死なうと云ふのは賊の心其の心を以て一口打ちなさい
是を聞いて資正大きに感服いたし「さう云ふことなら貴方のか
言葉に従ひまして私の無分別を改めませう 村正それは勿論
親に先立つと云ふことを是れ不孝なりまだ十八歳と云へば是か
ら先一と花所ではない二花も三花も心懸に依つては花を咲か
せることも出来る、サア斯う云ふ所では長話はいかぬもの 資
それでは斯うお行でなさいまし」と先に立つて資正は案内を致
す所へ向ふからやつて来ましたのは資正の父資重用足に行つ
ての跡途 資重其處へ来たのは悴ではないか 資正「オウ親父
さん 資重何處へ参つた 資正「實は斯々斯々私の無分別を

名 刀 村 正

摸國の村正殿が異見を言ふてお助け下され向樋をして一口練
へた其の刀を雜賀明神様へ納めて其の上で覺悟をしろと色々
の御歌訓どうぞ阿父さんから能くお體を仰有つて下さい「聞く
より資重は一度は驚き一度は喜び 資重それは其方が心得違
ひ貴所様には始めてお目に懸ります私には此の資正の父資重で
ございませう能うこそ悴の無分別を乞異見下さいました何は鬼
も角も手前共へお入來を願ひますと案内をして己れの家へ村
正を連れて参り是れから洗水を取つて出す村正は足を洗つて
座敷へ通つた上座へ蒲團を敷きまして 資重「どうかはお坐
り下さい 村正「是れは勿体ないどうぞ普通で御挨拶を願ひま
す「其の内に酒肴を出し 資重「何はなくとも粗酒一献か飲り下
さい「在家のこと故好む肴はございませぬが厚遇を看として
時は酒を飲交し其の夜は其の儘寐て仕舞ふ翌日より精進潔

名 刀 村 正

いたし茲で村正は身作ひをして孝子資正の向櫓となり急々三
七二十一日の間に鍛上げた一刀鑑卸し研も相濟み柄箱書入も
美事になし白木の三寶へ載せて切火を打つて八百萬神と認め
てある掛軸の前に飾つて貴重資正村正の三人三拜を致し村正
さて親子の衆愚眼なれども此の村正が拜見して先づ新刀とは
見えぬ儘かに古刀の類と見える恐らく私の見た所と孫左衛門
尉兼光殿の見る所とは違ふまい必ず心配無用のこと明日は其
當日今宵は早く休らうて吉左右をか待ちなさいと村正が力を
付けて呉れた親子の者は大きに喜び其の夜は其の儘寝て仕舞
ふさて夜が明け急々當日此度は備前の兼光が上つたと云ふ
ので國々より刀鍛治が大層上つてゐる雜賀明神の神前の左方
に十五間四面の假小屋を拵へ死處に諸國の刀鍛治が皆集まる
早朝より正面の處へ控へたるは備前國の住人孫左衛門尉兼光

名 月 村 正

越中御腹山佐伯の住人五郎次郎則重當番にて今日鑿定に及ぶ
諸國の刀鍛治は今や當番が何と落言いたすかと思ふてゐる所
へ第一一番の鏡に當つて其處に進んで出でたるは孝子資正心
かに白木の台へ載せた一口を恭しく持つて出でる備前兼光
面を懸けたることにて之れを取上げ押頂いて一通り朴の木で
造りし棒箱を改り又押頂いて鞘を拂ふ其の時は唯一心の外決
して他事を思はず霎時兼光は打眺めてをりましたが再度鞘に
納めハタと横手を拍つて打上げたりや鍛へたり賊に以つて天
下無類の名作かな帳面掛りはを取つて控へてゐると兼光
上の一番和泉國の住人資正と呼揚げた之れを聞いて資正は餘
りのことに嬉しく先立つものは涙なりそこで死狀を貰つて
後へ退る第二が京都油小路の住人長兵衛尉國重三番が石見
の住人久左衛門尉直綱其の外三十人と帳面に認めたる其の日の

名 刀 村 正

晝頃漸やく終つて白木の額へ三口の刀は一三三と順を付け其の下へ名前が入つて多くの強力は足場を組んでムツカリ支度
がしてあるから直ぐに其の額を神前に掲げ懸て足場も取拂つ
て茲で酒を下さる神前の右方の假小屋で強力共は吾輩を打
つて腹を撫でつゝ今宵は飲明をしやうと酒を飲出した此方
は資正弟子を連れて飛ぶが如くに己れが家へ戻つて参る情が
麗はしき顔をして歸つて来たから親父の資重もそれと察し土
間まで下りて来て「仲今日首尾は如何であつた 資正」阿父さ
んお喜び下さいお泊客村正殿のお蔭にて私が幸ひにも上の一
番になりましぬ 資重「エ、それは……」と言ふと餘りの嬉しさ
に資重其處に腰を振かすばかり村正も之を聞いて奥より立出
で「何しろそれは結構なこと 資正」ソレ頂いた其の酒肴を此
處へ」と五人の弟子も此處へ呼びまして祝賀の酒宴をして其の

名 刀 村 正

夜は心持能く寝て仕舞つたさて翌日は村正も此處を出立した
いと思ふに付き雜賀明神へ参詣をして額面を見たいと資重親
子並びに弟子達と同道を致して雜賀明神へ参り額を見上げる
と昨日は上の一番和泉の國の住人資正としてあつたのが上
番油小路の住人國重、上二番資正としてある餘りのことに呆れ
果て 資正村正殿昨日は儲かに私が一番で此の通り死状まで
持つてをるのに何故あつて斯う云ふことを致しましたかと言
ふと親父の資重が是は悴が大概己れが筆を以つて書いた死状
であらう二番を一番と向ふで書損ふことはあるまい弟子の者
共は「イエさうではございませぬ私等も昨日若い親方のお供を
して来て一番と云ふのは儲かに見届けました之れを聞いて資
重は赫と怒りさては京都油小路の國重奴が二年續けて上一番
三年目に上二番となつたのを遺憾に心得て若き者の身出書

名 刀 村 止

を羨み斯くは取直したに違ひない申怯な奴だと言ふと身の長
六尺八寸力もな者なき程の村正拳を固めて額の真中へ飛掛つ
て強く打てば物の美事に落花散ると白木の額を打落す忽ち額
に両手を掛けて散々に打ち破り我等が力を添へて打つたる孝子
の刀を後へ下げ已れが鈍刀を第一に置くとは何事ぞと火炭の
如き思を吐いて怒つた所へ來掛る國重の弟子の國義國友之れ
を見るよりさては無頼者此方がお師匠様の假へたる刀が掛け
てある額を破つて狼籍するとは何事ぞイデ物見せうと左右よ
り打つて懸れば村正はヒラリと膝を代せしまゝ國義國友と云
ふ奴をユ一と一罵叫んで左右に投出す起上つた國義は早くも
馳歸り櫻屋と云ふ宿にゐる國重の許へ來て先生大變でござい
ます貴所が打つた刀を額から打落し額を徹盡に碎き狼籍を働
いてゐる者がございますそれを聞いて一杯横嫌の國重ナニ我

名 刀 村 正

が打つたものを打落し額を破るとは身の程を知らぬ愚鈍者そ
れならば臥重が參つて其者を一刀の下に斬つて捨てんと酒の
横嫌で覺えの一刀を左りの手に握んで宙を飛んで駆付る此處
は名代の江州佐々木の居城跡有名の雜賀明神のお鳥居前乘込
み來つて村正を目懸けて決闘を申込む國重村正鳥居前の斬合
ひに移ります

第 六 席

貴重の弟子は國重が此處へ乘込んで來るのを見て弟子アレ
くを覽なさい相摸のお客様向ふから國重が刀を抜いて馳け
て來ました村正突立あかつて見ると此所に馳來りましたのは
油小路の國重國重やア何奴なれば吾が棒げた其の額面
の尊とい刀を地上に落し土足に掛けたるや村正「緒ては汝は

正 村 乃 名

國重と云ふ向ふ見ずの大馬鹿者か吾こそは天地間に其の名の
鳴り響いたる五郎正宗の末弟仙香太郎村正切味美事な一口は
汝が持つたる鈍刀より儘かなりさア近寄つて見ろと罵れば
國重何を小癩な昨日今日の小僧共此の國重の一刀受けられる
ものなら受けて見よと斬掛ければ抜合せてカツチリ受止め折
つて開いた一文字一聲叫んで斬込む村正心得たりと丁々發矢
火花を散らして斬結びました其の中に用人鋤せりとなり鳥居
の所へ國重を懸付けんと焦り立つれば地上から出でるを神
代杉の根つ子へ足を踏掛ける國重心得たりと堪えしは堀川の
争ひ新くやと計り怪みたり所へ駈けて参りましたのは堀川の
國重國重ア俺れに委かして呉れコレ國重知らぬ顔ではな
し放のお客も待つて下さいと着てをりし羽織を取つて投げし
まゝ忽ち扇方の刀を取除け國重悪いやうにはせぬから何本

正 村 乃 名

此の堀川の國廣に委かして貰ひたい所へ又も備前兼光越中の
則重などが馳付けて漸やく双方を宥め是れより宿の桐屋と云
ふ茶屋へ双方を同道いたし話を聞いて見れば國重はサウ云ふ
ことをした覚えはないと云ふそれでも上の一番國重二番資正
と云ふやうに直したのは何者の仕業であらうと段々尋ねると
弟子の國義國友去年まで師匠の國重が上の一番であつたもの
三年目に二番になつたのは残念と師匠の言付けではなく二八
の弟子がしたことで解りましたから備前兼光堀川國廣が問へ
遣入つて國重の弟子の國義國友は散々に意見をされ向後を
め資正の前に手を突かして謝らせましたそこで此の事は何
もなく済みましたこゝで國重は大坂の方に川事があるからこ
云つて其の翌日村正に別れを告げる村正も人の爲めに國重に
向つて腕立をしたことを謝し再會を期して別れました國廣は

名 刀 村 正

其頃有名の人で村正に向ひ 國廣京都へお出でになつたらば
堀川の宅へお入來下さいと言つて是も一旦別れた實正は改め
て村正の弟子と相成り師弟の約定を結びましたそれ故實正の
鍛つた刀は村正に似てゐると云ふのは村正を師として學んだ
からのことわざです茲で村正は後の約定を致し親子の若
に別れを告げて長れより京都へ還入りました三條通新町小松
屋重右衛門方へ止宿りまして是れより洛上洛外の見物を心を
きなく致し神社佛閣等を拜します是れは勿論元來村正は觀
世音を平常祈念いたしますそれ故先づ第一に音羽山清水寺を
れより三十三間堂の觀世音を拜さうとて参りました此の三十
三間堂は千駄の觀世音を安置し本尊は千手觀世音堂の長さが
六十六間二間に桂を立て其の數三十三幕府歴代は此所で通
矢を致したと云ふことは能く聞いてをります今村正は觀世音

名 刀 村 正

を参詣いたして是から仙手へ廻らうと云ふ途端に向ふから参
りましたのは堀川の國廣 國廣イヤ先日はよく地辨なされて
此の國廣も大きに喜ばしうございしました能く此方へ來て下す
つた實は此間實正の所から弟子が手紙を持つて参り村正殿が
必ず其地に参るからお世話をお願いしたいと申して來たあの村正
は私の弟分兄弟の約束を結んでゐるは三年前からのこと行末
頼もしき者でございませすからそれ故私も此度大人が義弟の爲
めに力を懸へて下されしことは腹の中で嬉しく思つてゐた又
大人の對手の油小路の國重はあれも私と兄弟の間柄それ故事
を大きくしてはならぬと心得て無理を願つて無事に治まつ
たのは誠に喜ばしく存じましたして何時頃此方へお入來で
村正左様で今日で五日ばかりになります三條通新町小松屋方
に足を止めてをりますので 國廣なせ私の所へお尋ね下さ

名 月 村 正

らない 村正、いふ先にお世話になつてをるのに又もお世話を
受けるのは失禮でございすからそれ故左様いたしました
國廣「それはどうも物堅いこと折角のことだから今日、は私の所
へお出で下さい」と先きに立つて無理に村正の袂を引きますか
ら人の深切を無にするのも失禮だから、そこで堀川の國廣方へ
参りました此の國廣と云ふ人は中々有名な人殊に頗る柔和の
人でございませす酒肴を出して手厚く待遇し 國廣「何うか當分
私の所へ足を留めて下さるやうに 村正「それは誠に恐入りま
したこと 國重「何の遠慮があるものか私の方より頼むと云ふ
は間があつたら何うか貴方の師匠たる天下高名の正宗大人の
所へ参つて一通り相州流の様子も見て置きたいと心得たが村
正殿が此處へ來たのは私に取つて何よりのこと何うか相州流
の行方を教へて貰ひたいものである」と町中に頼む名人上手と

名 月 村 正

なる人は已れの流儀ばかりは守りませぬ必ず他流を能く見て
置く尤もそれを真似る爲めに見るのではない何でも世間のこ
とは廣く明るく覺えてゐてそれで心を固くして参るのが名人
上手の仕方、それ故國廣は此の村正を泊めて置けば正宗の流儀
も坐ながらにして覺えられると考へたのは誠に抜目のない人
でございませす、それと察したから村正も 村正「然らば宿を引換
つて参りまして當分お世話を蒙る」とそこで小松屋方へ其の夜
は歸つて諸勘定を済ませ翌日から國廣の所へ來て足を留めま
した前にも申す通り此の國廣は極く心が静かで其の有様は水
の如く何事も人の家は相性によるもので男が水で女が火、火水
で夫婦になつては悪いと云ふが人の中に火水を嫌ふては今日
人間が生活することが出来ない何故なれば水は方圓の器に從
ふと云ふやうに隨の通り圓い物に入れれば圓くなつてゐるし

正 村 刀 名

細長い物に入れ、ば水は其の細長い物に従つてをります極く
柔順でございませすが其の代り怒ると海嘯と變じて家も何も流
して仕舞ふと云ふ勢ひになる火は幾ら強いて言つても起つて
ゐる中だけのことで消えて仕舞へば灰と變じる是れに依つて
女の火を男の水で養うやうにする是が反對に火の男に水の女
と來るから家内の治りが付かない國廣は村正が自分の家に來
た時から始終心を注いで細工場で鍛つ時の櫛子を見ると成程
名人でございませすから國廣が手を叩いて喜び是は好い人が來
て呉れたと思ふから下へも置かないやうにして待遇つてをり
ますすると國廣に妹が一人あつて名前を松江と云ふ或る晩の
こと國廣と村正は酒を飲みながら國廣偕て村正さんか願ひ
と云ふのは外ではないが私の妹をせうか女房にして貰ひたい
ものだ私も及ぶ丈けは力になるからせうか當國へ足を留めて

正 村 刀 名

永住をして貰ひたい殊に私は兄弟二人ぎり親類縁者と云つた
所が一二年しかない何うか承知をして貰ひたいものだ村正
それは誠に有難いが師匠の意見で三十歳になつたら妻を迎へ
ろと云ふことそれまでは私も立身をした心掛け……國廣
成程それでは何うか今日から私と兄弟になつて貰たい村正
それは勿体ないこと中々私のやうな者が兄弟になるなと云は
……國廣イヤ其様なことはないから何うか承知をして下さ
い村正然らば兄弟になりませう國廣それは有難い幸ひ今
夜飲んだ此の酒盃の取りやりは言はずと知れた兄弟の縁を結
んだ証據と主人の國廣は悉く喜んだ其の後は國廣が用があつ
て家におませぬでも村正が代りをして事をするやうな次第
子も彼は三十人前後もあつて中々盛にやつてゐるすると國廣の
女房は元と京都の白拍子で其の名前を秋代と云ふ呼ぶ恐いから

名 月 村 正

お秋と言つてをります實に有名の美人其のお秋が村正に心を
掛けて人なき折は袂なきを引くやうなことがある村正は賦に
困つた是は此處に長居は無用何とか工夫をしなければならな
いと素より物堅い人であるから色慾などに心の迷ふものでは
ない然るに月の十五日は何時も休日で弟子などは遊びに出る
國廣は用達しに出掛け留守は國廣の妹の松江村正は酒が好き
だから夕方まで一人で飲んでゐる彼是點燈頃に入口で女御
苑なさい柳屋から來ましたが何うぞ村正さんに此の手紙を上
げてお呉んなさいと蓋置いて其の儘歸つた松江がそれへ持つ
て來たのを受取つて見ると表は村正様として下に新町柳屋内
國廣と書いてある一体國廣と云ふ人は字の書けない人で他人
に頼んで手紙を書いて貰ふ村正もそれを知つてゐるからさて
は月の十五日だから柳屋へ行つて取んでゐるのであらうと封

名 月 村 正

を開いて見ると案の如く待つてゐるから直ぐ來て呉れどの女
句、それでは松江さん私は一寸行つて來るからと支度を致して
村正は三條通新町の柳屋へ参りました女中お客さん此方へお
上んなさいまし村正お許し下さいと女中の案内で離れた座
敷へ参る唐紙を開けて中を見ると取列べたる五色七色の酒肴
女中は向ふへ行つて仕舞ふそこにゐるのが國廣の女房お秋で
村正と顔を見合しお秋モシ村正さんよく來て呉れました今
まで夫が此處で飲んでゐましたが少し用が出来たから先さへ
歸る村正さんが來たら待遇して呉れると言置いて参りました
さア私が國廣に代つてお對手をしますから寛く上つて下さ
いまし村正それは何より添けないこと然らば取置いたしま
せう一杯二杯呑んでゐる中にお秋は村正を流し目に見て秋
此間から私がお前様の色々申すのに私の思はくを少しも覺つ

正 村 刀 名

て呉れないで其の儘にして置くとは何事今日實は夫が家へ歸りが遅いと云ふことを知つて貴方を此處に呼び置した何うか私の願を叶へて下さいと懇てのことに村正の側へすりより是なるお秋が村正の手を握らんとするから村正は大きに驚いて向ふへ突きのけ村正何をなさる兄弟の縁を結んだ間柄さう云ふ見苦しいことは以來とも止めて下さい斯様な處に長居は無用と疊を蹴立つて出て行く様子お秋は呆氣に取られて只村正の後姿を見送つてをりました

第 七 席

茲に堀川國廣の妻お秋は殊の外村正に逆理の情を通はすと雖も村正は物堅くして少しも淫婦おきなる者の情に迷はず且は國廣と兄弟の縁を結んだ間柄でございますから中々道を破る

正 村 刀 名

ことなごは出来ませぬ是れが爲めに淫婦の常として巳れの情の通らざる時には却つて人を恨むものでございます誓の上げ下しに真人の國廣に對して機々村正のことを惡様に申し立てます雖も柔和温厚の國廣でございまして村正は昨日今日參つたものでござい升しおきとは餘程前より夫婦になり苦樂は俱に他人にも言ひ難きことを申し將來のことまでも話し合ふのが夫婦の情それ故に勃然としまして今日村正に言はうか明日は言はうかと思つてゐる其の様子が自然村正にも分りますから村正も困つたことだと思つて居る然るに或る日村正は清水寺の觀世音に參詣いたして戻つて参りましたすると國廣は奥の座敷からツイと出て参りまして國廣扱て村正殿貴下と私しは縁あつて兄弟の約定を結んだがもう今日は私しも堪り兼ねたに依つて言つて聽かせる能う聽いて下さい

名 刀 村 正

のことではないが三條通り新町の一口茶屋で何故私しの女に切ないことを言つて聞かせ其人有る者を其方が言ひ分を透さうと云ふのは情けなきこと私しは其方の刀打つことに妙を得たる能き人と思ひ斯う云ふ人に就いて業を勵めば共に益になること、今までは堪へてゐたなれど強つて然しいと云ふのなら見てゐる前で我が女房のおあきを連れて行くが宜い其方みたやうな者と此の國廣が兄弟分の縁を結んだのは誠に以て生涯の失策本來ならば小遣錢なせは遣らぬのでも宜いが旅を抱へた其方のことは是れは些少ながら草鞋錢之れを持つて疾くと出て行つて下さいと投出した銀子五枚村正は餘りのこととに呆れ返つて唯だ茫然と四邊を見廻はすと火鉢の前に煙草を喫らして彼の淫婦おあきは素知らぬ顔で天井を眺め横目で宜い態だ人の言ふことを言かない為りにソレ見る斯う云ふ所

名 刀 村 正

で意返したと言はぬばかりの有様は飛掛つて押へ付け首根つことを引觸み疊の縁に鼻頭でも摺り付け罵しつて遣らうかとは思ひしが疥癬強き村正に似合はず今日は寛仁大度此處が堪忍のしどころだ我が身に覺えのない以上は天道の知る所と胸を押へて膝をハタと叩き村正如何にも私しが悪かつた何と言はれても申さうやうはござらぬ國廣殿今まで種々お世話になつたは誠に以つて辱しげない折角下さる是れなる金子は決して粗畧にはせぬ併し私しが唯つた一言言ひ置くは垣堅ければ犬入らず此の言葉は私しが作つたのでは無い往古より言ひ來つてゐること私しが云つた此の一言は必ずかお忘れのないやうに願ひます國廣エ、尊々言はずに出で行かんか其方の顔を見るのも穢ららしいと何時も穢かな水の澄んだる形に似たる國廣が烈火の如くに怒りては何程火水を取扱ふ其の細治

名 村 正

職でも程のあるものかなと家内の弟子兼は思ふ位なれども上
に立つ人の腹立ち眼下の者が何れも口に出しやうもなく顔
見合はせて控えてをりました其の中に村正は支度もソコ
に國廣の家を立出で油小路の長谷部兵衛尉國重の許へ参つて
此の話を致しなすと國重はそれは氣の毒千萬なこと貴下と私
しは台外江州雜賀明神のお鳥居前で一時の怒りから斬合ひを
したたがそれも譯が分つて見れば素より恨みなきのないこと却
つて是れからは力に思ひ其方が京都に來なされてからア、長
い人が來たと思つてゐる位國廣に逢ふたときも能く其方のよ
とは粗末のないやうにして此の地に永く足を留めるやうにし
たいものだと言つた位それを今度のやうなことが出來ては
にお氣の毒だが併し其方に覺えのないことだから何にも心配
するには及ばない其の内に私しが折りを見て言ひます程に當

名 村 正

分私しの所にゐて下さい 村正どうも種々ご心配を掛けて
みませぬと云うか宜しく願ひ申しますそこで村正は面白から
ぬと思つたが自分も少し心願があること云ふのは大内の横様を
手續を以つて何うか一つ拜見してそれより又國廣を廻り神社
佛閣に参拜して末は師匠正宗にお詫を致して相携の國へ参つ
て其き名鍛冶と言はれやうと云ふ目論味は人には言はねと所
存が充分固まつてをります
然るに此方は堀川の國廣村正と兄弟の縁を断つて幸ひを得た
賊に村正と云ふ奴は性質の腐つた奴口ばかりで腹は少しも願
み甲斐のない人間だと世間を見ない若勞をしたことのない國
廣でございませうから深く村正を恨みました
氣をつめて學問したる人よりも
何にも知らぬ苦勞した人

正 村 刀 名

世の中に若勢の足りない人には迂漸したことは言へないものでございませぬが詰り角が取れて無暗矢鱈に怒ると云ふやうなことの無いのが苦勞人でございませぬ何しろ國廣が賊に物堅いと云ふだけで他國へ出たこともないから深く人の心を知りませぬ所が此頃女房のあきが毎夜の如くに宵の口から出て丑刻頃に戸外の戸を叩きあき此方の人今辰つて來ましたなと云ふやうな次第朝の早い業でございませぬから國廣は毎夜の如く自分の女房が歩くので物案じをして眠られませぬ位何で今夜は此様に遅く歸つて來たかと聞くとあき「家の繁昌をやる爲めに祈念を掛けに參りましてございませぬ聞けば道理らしきことだから國廣は素よりあきのこと云へは少しも疑はない左様かと言つて其儘にして置きました折りしも仲間の

正 村 刀 名

集合などがありまして國廣は朝から家を立出で一同密合つて夕景になつて一杯呑み〇それでは好い梅壁に相談も済みました何しろ今度の祭禮には此の銀治殿だけで北野の天神様へ願でも奉納しやうと種々話合つて丁度八時頃彌々散會と云ふことになつて△それでは結構能う宜しくお願ひ申しますと皆自己がまに々東西に別れ南北に離れて立歸る國廣は一入てブラ／＼歩いて參り唯今三條通り新町の柳屋と云ふ茶屋の前を通ると向ふから櫻屋と云ふ提灯を照け博奕打ちの親分で丸山の佐五郎と云ふ奴と現在己れの女房のあきが手を握りながら校へ揚子をして彼がへ／＼此方へ／＼眼めきながら千鳥足でやつて參りました丁度四ッ辻の角に立ちまして四邊を見廻はしあきそれでは丸山の親分さん今言つたことは忘れて呉れてはなりませぬ佐五郎いともあきさん必

正 村 刀 名

らす忘れる氣遣ひはないお前も國廣の眼に掛らぬやうに……
あき、宜いとも、其儘に右と左りに別れて行つた國廣は之
れを見て、國廣「ハ、ナ、是は妙だ何のことだらう併しおあきは
村正に無理難題を言はれたときも大きな聲を出して好い盛梅
に女中の助けを受けて裏口から逃出して來たと云ふ位の堅い
女して見ると是は以前白拍子をしてゐたことゆゑ前方馴染で
あつた人と行遇つて呼び込まれ一杯相手をして呉れると以前
おあきも客商賣其の機嫌を取扱ふて大方話をしてゐたのであ
らう、ハ、何にも言はぬ方が却つて宜からう此間も大變を
揚げ又値かことで彼是れと今度は女房を疑ふと云ふのは却つ
て此方の心の小さいこと、それも夫婦差向ひなら兎も角も弟子
衆の者も大勢ゐるし男は餘り心を小さくしては其の一軒の主
人とは言はれぬものと斯く思つた國廣は扱ても其の夜は別段

正 村 刀 名

何にも言はず知らぬ風をして前きに我家へ立歸り奥の座敷に
寝て仕舞ひました然るに是より三日目のこと國廣は京都の在
白河村の名主庄右衛門方まで參らなければならぬと云ふのは
日外頼みの二尺三寸六分相模鍛冶の物が欲しいと云つて而も
村正に頼んで俺が向ふ槌となり村正が元槌となつて鍛へ上げ
た一刀研ぎも上り拵へも出來た此の箱入り顔を見れば惜いと
思ふがア、賊に鍛へた刀の切れ味は慥とする程美事なものと
已れが名人の部に至つてゐる位の國廣であるから表面は村正
を惜いと思つても商法向きのことでは村正に己れも及ばぬこ
とを知つてをりますから鞘を拂つて樂つ妙めつ打眺め懸て元
の通り鞘に納めて箱に入れ風呂敷に包み支度をして一國廣を
れでは行つて來るから留守を頼むと表の小路を出てまして追
々と參ると山中越しと云ふ所より八町ばかり手前に來ると後

名 村 正

がより手拍きをして。○、オイ其處へ行くのは國廣ではないか
國廣「オヤ何事かと思ひましたら油小路の先生か 國重「お前に
少し話があるから一寸顔を貸して呉れ眼上の長谷部國重に呼
ばれましたから國廣も否應を言ふ譯にはなりませんね 國廣「長
さりました 國重「彼處の香雪軒と云ふ家で一杯呑まうから來
て呉れる御公家衆のお方々がお忍びで來たり或は諸大輔のお
方もお出でになつて呑むと云ふこと何しろ彼處へ行つて見や
うと言はれて此方も好きな酒後方に尾いて來ると 女「被入し
やいまし、オヤ先生方でございませすか離座敷の方の座敷に這入
つて眺へ物をする 國重「サア國廣堅くならぬで呑んで呉れな
ければ困る 國廣「ハイ頂戴いたします 國重「疾うからお前に
言はうと思つたことがある、それは外のことでもないが相模の
國から來てゐる正宗殿のお弟子村正彼の人は強情だ短慮の人

名 村 正

だと云ふけれども實に此の職のことに付いては言ふに謂はれ
ぬ誠まことに届いたいた有様ようどうか私わたししの云ふことを聽いて此頃このころに改め
てお前まへと村正むらまさと私わたししと三人さんにん列ならんで一杯一杯呑の合あつて笑わらひ顔かほを見せ
て貰もらひたいものだそれが爲ためめに實まことは村正むらまさを私わたししの家に今留いまどめ
てある位くらいどう云ふことがあつたか能あたくは知らぬが兎角とつと人は針
程ほどのことを棒ぼうのやうに言ふのが世間よこしまの風習ふうじゆさう云ふとお前まへの
家内けい内を回まわますやうだがどうか何なににも言はずに此頃このころに一杯一杯呑の
で笑わらつてお呉くれ 國廣くにひろと尤なほもでございませす先生せんせいの前まへだが私わたし
も心こころから村正むらまさを惜おぼいと思ふ譯わけではございませぬ家内けい内の前まへもあ
る故ゆゑに餘あまり意氣いき地ぢのない男おとこだと思はれてもならぬからそこで
實まことは家内けい内の者ものの見せしめに一時ひとときは口くちへ出でして申しましたが宜よろ
しいそれでは先生せんせいの仰おほせに従したがつてお邪魔じゃまながら罷出はいでてまして
貴公きこうのお取持とりもちち莞爾わんじ笑わらつて元の通り兄弟けいだいの縁ゆかりを結むすばして頂たまま

名 刀 村 正

ませう 國重「イヤそれは誠に辱しけない私しはそれを聞いて
何より嬉しい、ぢやアそれでは今日は此家へ泊つても構はぬか
ら充分呑んでお呉れ何なら白拍子でも呼ばうか 國重「イエを
う致しまして私しは是から白川村名主の庄右衛門殿の所まで
参ります、之覽の通り是れなる刀、而も村正の元髓、私しが向ふ穂
何と好い出来ではございませぬか」と出して見せるのを 國重
酒の座敷で刀を見ては濟まぬが、それでは嗽をして拜見をしや
うと親しき中にも禮儀あるもの口を嗽いで手を拭き蒲團を拂
つて其の儘に押敷いて劍の一刀鞘を拂つて見ておれば實に夏
尙は寒き殿寒の氷を二の割に割つたる如く明皎々と致しまして
申し分のない刀 國重「成程是れでは白川村の庄屋さんもお悦
こびであらう、それでは國重早くお前持つてお出で 國重「ハイ
有難うございます、それでは今日の入費は…… 國重「アレは何

名 刀 村 正

をするのだ勘定は私しが前に拂つて置いた 國重「何時も貴公
の如才ないことは此の國重も真似が出来ませぬ、それでは今日
はと馳走になりつばなしを機嫌宜しう 國重「それでは立たな
いよ」と粹を利かした一言に女中が出す履物を礎然穿き空腹で
呑んだ酒機嫌村正と再度縁も繋がるかと思へば何となく嬉し
きこと、國重も途中を急いで白川村参つて見ると丁度名主も
宅にをりまして 庄右「ヤア先生能くお出でなすつたサアと
ぞ此方へお通り下さい 國重「之免下さい」と座敷へ通る 庄右
「コレよお茶を入れて持つてお出で」一体水が長い所であるし、
治は茶所と言つて歌にも唄はれる位山城は茶の本場でござい
ます、纏て國重は眺への一刀を名主の前に出すと 庄右「ア、出
來いたしましたかそれは辱しけない、それでは拜見を致さう、
眼鏡を持つて來てお呉れ、家内が其處へ参つて挨拶を致し、

名 刀 村 正

鏡を主人に渡す名主の庄右衛門眼鏡を掛けて右の刀を抜く前
に一度押敷き禮儀正しく引抜いて見れば刀表、刀裏、焼刃、金色、
香氣、帽子先よりオンと下つて物打際、鋸際まで一点の濁みなき
相州作りハタと手を拍ら 庄右衛門は上作有難うございませ
に結構船く出来ましたそれでは是れは何程…… 國廣「左様で
ございませ私しも平生貴公にご恩になつてをりますから此の
一振は差上げます御意に叶つたらさうぞお用ゐを願ひます
庄右衛門それは先生往かぬお前と私しは懇意の中であるけども何
しろ只貰ふと云ふ法はないさうか取つて置いて下さい」金子
百枚を其處へ出さから 國廣「エ斯様に多分頂戴いたすこと
は出来ませぬそれでは斯様いたしませう金子五十枚戴きまし
て銀つたる者へ之れを遣りたうございませす實は相模の正宗の
弟子の村正と云ふ者で其者は旅を抱えてをりますから金子を

名 村 正

遣はしたうございませす 庄右衛門は尤ものことそれではさう
か後の五十枚も私しから其の人へ餞別にやつて貰たい 國廣「
左様でございませす然らばお言葉に従つて是れは村正に遣は
しませうそこで金を懐中いたし 國廣「私しも少し用事がござ
いますからと死を禁ります 庄右衛門「其様なことを言はない
で折角来たものだから一杯呑んで戴かう 國廣「有難うござい
ませすが此の次ぎ上りましたときに戴きたうございませす 庄右
其様なことを言はないで私しも丁度夕飯を食へなければなら
ぬ所「アで飯前に一杯呑らうと思つてゐるのだから一杯呑ん
で行つて下さい逃げるにも逃げられず素より恩を受けたる庄
屋の庄右衛門に止められましたから此處で國廣が一杯呑んで
種々村正の話なども致し庄屋も大層悦んだ今突出す鱈はもう
八時頃 國廣「それでは是れで死を頂きます 庄右「宜いでは

名 刃 村 正

ござらぬか今夜はお泊りなさい 國廣有難うございませうが明日が早うございませうから 庄右、ア、それではお留め申さぬから注意してお出でなさい、コイヤ提灯をお貸し申せ 國廣「イエ今宵は秋の十五日月は満月でございませう 庄右オ、左様だつた此の通り座敷の中まで松の影を差してゐるのに之れに氣が付かぬでをつた 國廣「イエどうかお立ちでは困ります 庄右「其處まで送らう」と玄關の外まで送り出す主人の語 庄右「是れでござんを蒙ります 國廣「内儀様種々お世話になりました 女「それでは先生氣を注げてお出でなさいませうし國廣は己れが作りし一尺九寸の一刀を落し差しに打込んでブラリ、白河村を後に致し山中越しと云ふ所を通れば詰り己れが住居の側へ出られる秋の七草は風のまに、打麻さ虫の聲音も何となく心淋しく見えました國廣は天を眺めまして「ア、是れは急に

名 刃 村 正

つて来たがどうか歸るまで降らしたくないものだと思ふ間もなくポツ、と降り来る大粒其の中に「オ、ッ、と俄かに盆を傾けるが如き大雨溜れてはならぬと其の儘に向ふを見れば午頭天王の破れ堂がある、それでは暫く此の堂を拜借しやうと漸く濡縁へ上つて木連格子をサラリと開けて中へ道入り元の如くに格子を締切り降込む雨に濡れてはならぬと賽銭箱の陰に暫く腰を屈めてをりました其の中に雨は小降りとなり所班雲切れに差し込む月の薄明り 女「一寸佐五郎さん 佐「オ、秋此様な所で雨に遇はうとは思はなかつたな之れを聞いて國廣は「コリヤ是れ現在我が女房の聲彼れは確に丸山の破落戸の親方で佐五郎ハアなど堀川の國廣は耳と引立て覗ひました、

名 月 村 正

破産の内には其人の國廣が様子を知つてゐるとは少しも知らず
 阿秋は猶も言葉を續け、ホンに佐五郎さん何時もに借した上首
 尾佐併しあきお前には國廣と云ふ亭主があるからこれが知
 れた日には大變だ斬う遇く睡つちやア取付かれやアしねエか
 あきナ家の繁昌新念のためにお參詣をして來たと云へばア
 云ふ馬鹿だから宜いやうに丸め込んで仕舞ふそれにお前は
 國廣の妹の松江に度々艶書をしたと云ふがそれを妾が横間か
 らお前の善い所へ惚れ込んで斬う云ふことになつたがナエ松
 江を瞞着してお前の妾位にはして上るから私を生匪見捨ない
 やうに……佐馬鹿を云へあきとんなことがあつても手前を
 見捨るやうなことがあるものか併し油断はならぬエ樹且にも
 亭主のあるものを俺が斬うやつてゐるのだから萬々一の事が

名 月 村 正

あると面倒くせエから亭主のこと二人が手に手を取つて……
 あきホンにさう云ふことにしやう今日は家へ幾許もお金も遣
 入るから國廣が白河口の名主の方から歸つて來たときに深酒
 に酔はして寝込んだ所を其の金でも引つ提つてお前と一緒
 何處かへ往つて仕舞つた方が天下晴れて氣樂なことが出来る
 と云ふもの、佐併し此處へ來て斬う云ふ話をしてゐることを
 世夫國廣だつて知る氣遣いはなからうだが俺の考へちやア手
 前と夫婦になるのはどうしても手前の亭主の國廣を生して置
 いちやア高い枕で寝られねエあきナエお前さう云ふことな
 ら私が食物の中へ毒でも入れて……佐其奴は毎度ある話だ
 が迂闊に詰らねエことは出來ねエ……斬うしやうぢやアねエ
 か翌日の晩乃公が庭口から忍んで往くからドンと打つた一
 つそれを相圖に裏口を明けて呉れば忍び込んで一打をやつて

名 刀 村 正

仕舞うそれが宜いせ、それから間を三日四日置いて家内の跡目
は弟子の内から拵らへて後片付けをして仕舞ひ金目な物は此
方に取り上げ天下晴れて二人が他國に往つて暮すやうにしや
うから歸つて来て、もう家に寝込んでゐるに違ひない、其の内
も降り出す村雨に、佐オ、又降つて来た通り雨だから長いこ
とはあるまい此の辻堂の中へ遁入つて少し休んで行くとしや
う、あきそれではさうしやうと淫婦森夫の曲者が今や腰を掛
けたる天王堂の濡櫓を離れて格子へ手を掛ける此の時に堀河
の國廣は木連格子を引明けて、抜く手も見せず、扱打にあきの左
の脇腹へ思ひ知れど、鋤突きで唯一突きに突き通す此の時雲間
を渡る、月の光りに顔を見ると現在あきの亭主國廣だから流
石の佐五郎ギョツとした様子、國廣は女の鬘を左りに取

名 刀 村 正

思ひ知つたか此の淫婦阿秋、ア、國廣さん誠に濟なかつたど
うぞ命計りは「と逃げん」といたすを、突然左りの高股をペラリと
其處へ切つて落す、血刀取つて國廣が「ヤ、佐五郎、已れも都路で
多くの子分を持つてをり、何不自由もない身でありながら人の
女房を横取りして、濟むと思ふか、翌日の晩に乃公の命を縮めや
うと悪い計みをしたからとて、天道は誠を照らし給ふ、思ひ知つ
たか」と突然飛掛つて、肩先深く斬り下げ、二の太刀で首を落す、刀
は拭を掛けて鞘に納め、二つの首は椽側に置いて、國廣ア、勿
体ない、此の天王堂を汚したが、今に此の堂は必ず修復いたしま
す、どうかお許るし下さいまし、これと思へば、私が心の足りない
計りに村正殿に濡衣を着せ、何とも詫の致しやうがない、これか
ら急いで行つたら未ださう夜更けたと云ふのでもなし、油小路
の國重殿の所へ行つて、此の昔二つを証據として、村正に詫をす

名 村 正

るのが屈覚だ。懐中から取り出した風呂敷に二つの首を入れ
たる儘跡をも見ずして逃散に駆けて行つたる此の先は音に傳
いた油ヶ小路國重の門口へ来て筆を固め、
一寸明けて下さい。國重さう云ふ聲は國廣か大分息遣ひが荒
ひのは何か事情があつたのかとガラリと明けて見交わす二人
國重、ヤア髪も乱した勢いでベツトリ胸に付いたる血汐はど
した。こと國廣一通りお話を申さなければなりませぬ。村正殿
は如何なされた云はれて向ふに坐つてをりました。仙吾村正回
願つて見れば國廣が半面に血汐を浴びて何となく兼子の變つ
た有様に村正も立つて参り如何なる次第と國重もろとも尋ね
るに風呂敷を開いて中より出す淫婦姦夫の二つの首始め終り
を物語り國廣誠に此方が思慮の深い計りに折角結んだ兄弟
の縁を切りしは何とも以つて申さうやうがないせうぞ許して

名 村 正

下さいと男泣きに國廣が涙を流すを打消しながら村正がそれ
で分つた何時か一度は其方へ見せやうと内々手元へ取り置い
たものがある、これをご覽せよ。國廣殿と取り出す一書表を見れ
ば阿秋殿佐五郎よりとしてある取手遣しと國廣が其の手紙を
見る長谷部國重は行燈の火を掻き立つて頼を構めて讀み下す
に佐五郎より阿秋に宛た罷書でございますから。國廣情は斯
う云ふ証據のありしは何より私が身に取つての幸福實は役所
へ訴へ出やうと思つたが証據物がなければならぬと心を痛め
てをりましたが斯う云ふものがあれば大丈夫。ソコで村正國重
の兩人が付添つてお役所へ願ひ出ると此の勝は流石に足利家
のお政治も宜く届いてゐる所矢野近江守と云ふお方が掛り
あつて段々調べるに始り終りが恐替分つたから携ひなしとの
お説きでございます斯うなつたから村正も大きに喜び元の儀

名 村 正

りに兄弟の縁を結びました諸君子は其の罪を悪んで其の人を
悪まずと云ふ比喩があるから二つの首は一緒に纏めて己れの
菩提所へ埋め訪ひをいなしました此の事都路に評番高くこ
れがために國廣は却つて幸福が積き何事もなく生活してゐる
それより一歳計り相立ち國廣は村正に「どうか妹の松江と夫婦
の盃だけは相頼む三十歳になれば娶つて貰うと先迷つて約定
したことであるから」と申すので村正も承知いたして迷かに松
江と盃を濟せました村正は最早都路の鍛冶職は太低知る者と
なり此處彼處の神社佛閣へ巳れの鍛錬た刀を一振宛納め殺氣
の振るやうに祈りましたに付てこれよりは一度當國を離れや
うと思つたから國重國廣にも相談をなし名主から貰ひ受けた
る金子百兩これなる半ばを夫婦になるときの費要と松江に渡
し旅の装ひを致して京都を出立なしこれより播磨の國に渡ら

名 村 正

うと恰度西山と云ふ難所へ掛りました時は彼此日の入相向ふ
を見ると六十計りの女が急病を起したものと見へて頻りに苦
んでゐる其の傍に十三計りになる娘が頻りに後ろへ廻つて撫
で撫りをしてゐる様子氣の毒に思つたから其處へ往つて私は
通り掛りの者が大分苦しんでゐる様子幸ひ所持の薬が
あるからこれを呑みなさるが宜いと氣付を與へ山の湧水を手
拭の先に含ませて頻りに介抱をいたすゴツクリ水諸共に藥は
咽喉へ通る落付いたものと見へてしめお蔭様で有難うござ
います宜い鹽梅に穩かになりました何處のお方でございます
かお禮の申さうやうもございませぬ孫は年端も往かない者で
ございますし介抱して呉れますにも手慣れませぬ故斯様に暇
取りました私は當國の者ではござりませぬ旅を抱へてをりま
すから藥を切らしたことはなければも此の後の山際で悪漢三

名 刀 村 正

人に出逢ひまして持つてゐた儘か計りのお金も取られ着更へ
の物まで攫はれてこれなる孫は谷へ擲落されましたが宜い鹽
梅に途中に引つ懸りましたので土地のお方を願ふて揚げて貰
ひ此處迄参ると石に跌づきパツタリ前に倒れました其の途端
日頃の苦難が一時に込み上げ俄かに差込で参りました 村正
それは賊にお氣の毒私は相摸國源氏山と云ふ所に住む刀鍛治
正宗の門人で村正と云ふ者私も勢州桑名の在には兩親もある
こと故日頃親の事は忘れもやらず吾身の後生を願ふは後のこ
とにして老人二人に何事もないやうに願ふてゐるが他人とは
云ひながら貴方の年榮を見れば私の親も同じ事例で遠國から
斯う云ふ播磨路まで來なすつたか善惡に抱はらずお聞き申し
た以上は及ぶだけお力になりませうと遠慮なくお話しさい
しめは貴方でございませうか先達て江州佐々木の雜賀明神の

名 刀 村 正

と社前で都の長谷部四重と云ふお方と刀の事で斬り合つたと
云ふことを聞いてをりますそれではお話しをいたしますかと
うかど他言はる無用に願ひます 村正それはお案じなさるに
は及ばぬ私の方からお聞き申すと云ふのだから天地の神に誓
つて決して他言は致しませぬ遠慮なうお話し下さい しめそ
れなればお言葉に従つて申します何が隠さう私には下野國柳
田の郷士柳田太郎兵衛正義の末孫私の夫は十郎兵衛正道其の
妻裁野と申しますこれは孫の歌代と申します者然るに私等夫
婦の中に設けたは悴重平次正時悴の妻は織尾と云ひ此の夫婦
の盆踊り他の國々に優つてこれ孫これが一の時足利大日堂
れを見物に参りましたと八木宿と云ふ所に向ふ疵の政八
と云ふ無頼漢がございまして動ともすると八の小娘女房衆に

名 月 村 正

難辨を付け元は武家出の者でございませすから禮義を心得て
さうなものだが酒と色どに身を持崩し、そんな事でも呑んで掛
ると云ふので此の者の練名を蟒の政八坏と申しませす、それが下
宿と上宿の若い者とが喧嘩を致したときに中に飛込んで狼藉
を致しました其の事に就て柳田村の若い者も中に這入つて
るからとて頼みを受けて悴の重平次が其處へ参り漸やく左右
へ引き分けました、すると其の蟒の政八が悴に向つて刃物三味
を致しませすから彼れを殺して以後の懲戒種々申し開けた上、黄
金を與へ逐ひ拂ひました左様いたしましたす、其の益踊りも済む
で其の年九月の末つ方夫婦揃ふて同國佐野の邊りの親類へ佛
の事がございませしてそれへ参つた辰り道夕暮時に利根川堤を
通る折しも怖ろしい雨で通り物でもしたとか何が天上をした
と云ふやうな區々の噂、暫らく経つと俄かに人聲、戸板へ乗せて

名 月 村 正

悴と娘の死骸を私どもへ搬ぎ込みました夫士郎兵衛殿は三年
前に物故つて私と孫が留守を預つてゐた所へ其の騒ぎ、どう云
ふ譯と聞て見れば何者かの手に掛つて利根川縁の河原にて殺
されたと云ふこと傍に落ちてゐたのが八木宿の政八様其の名所
は柳田の上宿權三郎よりとしてある手紙一通は悴や嫁を殺
したの確かに柳の政八と知れて堪れば片時も猶豫は出来
せず村司始め村方のか方を頼んで後を逐ひ掛けました、何處
へ往つたか行方も一向に知れませぬ位々、悴や嫁の死骸は菩提
所へ葬むりそれより百ヶ日の追善供養も済ませ、情々考へて見
ませすれば元は武家出だが無頼漢の爲めに命を落すとは情けな
いことそれも前世の約束と断念は付けたやうなもの、と先祖
に對しても申し譯がなし、大膽不敵の者と思召しませ、先祖
うが孫の歌代に助力して西は九州薩摩、北は越後の浦々まで

名 刀 村 正

天を飛び地を渡るの術をば仕方なければ彼の者の往來する
所を見届けたなればと領主に願ひを上げ逆縁ながら悴や嫁の
仇を討つた其の後にて立派な婿を孫に娶らせ柳田の苗字を續
がせんと故郷を去つて三年目浪花の地へ参りまして天満筋の
天源堂理山と云ふ卜筮の先生に見て貰ひました所これは西の
方角の金を取扱かふ所へ往けば自然に仇人に出逢ふて其の時
力になる人が出來ると申しました何を空言を云ふかどて推返
して申しますれば金を取扱かふ所と云ふのも火の中に金を入
れてそれを延べ刀の付くものと易の表面に出て見れば大方西
國の鍛冶職が多く住んでゐる邊りを尋ねて見るか宜い萬一こ
れが外れたなら永年の間晝夜心を碎き苦辛をした易學を捨て
外の業に就かふと云ふ立派な申し事に此方も其の氣になりま
して遂に浪花を後にしてそれより遙々常國に参り此處で賣方

名 刀 村 正

にか目に懸り斯う云ふことをか話いたすも何かの因縁のある
ことでございませうお笑草迄に申し上げますと老婆が涙を落
せば思はず孫の歌代もヨ、と地上に泣き伏しました草鞋の紐
を直しつゝ、聞た村正も共に熱き涙を流し世に敵討仇討と云ふ
ことは古き草紙に見たなれども六十以上の老母が二十未滿
の少女を連れて悴や嫁の仇を討たふとは實に健げな思召し義
を見てせざるは勇なきに似たり今の卜者の言葉聞き思ひ當
るは西と云へば此の山陰道に若かずこれより幸ひ備前の地に
參れば彼所は総じて長船一家と申し孫左衛門尉兼光乃至は長
光或いは助定それゝ備前鍛冶には有名な者もあり事に依つ
たら仇人が其處にゐるかも知れぬ此の村正が今日より及ばず
ながら力となり備前へ渡れば吾等の師正宗が門人に加へたる
名代の長兼兼光と云ふ人は義侠に富んだ者故に諸事打明けて

話をしたら正敷否やは申すまい心配なく此の村正に付いて
 お出あれ云はれて餘りの嬉しさに先たつものは涙ばかりしめ
 それでは今日よりは宜しくお力を借り申し進縁ながら仇討
 をいたしたうござる」と此處に下野の國柳田の郷士重平次正時
 の母萩野孫の歌代の手を引いて義侠に富んだ村正は備前長船
 の孫左衛門尉兼光の所を指して乗込み來るこれが名代の柳田
 正時の母萩野が仇討を致すと云ふ一席でございます

第九席

名刀村正

この備前國長船の住人孫左衛門尉兼光と申しまするは
 の名人でございまして此人の鍛へましたる刀は實に得難きは
 せの名刀でございまして村正は下野國柳田の郷士柳田重
 平次の母萩野並びに同人の孫の歌代を引連れて備前の兼光の

名刀村正

許へ罷越しました相摸にをりし村正が老女や少女を連れて
 りましたから兼光は不思議に思ひまして兼光如何なる次第
 で當國へ來なすつたか何か是れには仔細のあることならん
 言はれて村正がさて先生貴方とお見掛け申して願ひたいこと
 がございます就いては何うかお召使ひのお方を暫時退けて下
 さるやう誠に一大事にして助力を願はなければならざる次
 第……之れを聞いて兼光は猶更に物案じつゝ早速離れの一室
 へ先に立つて案内をするやがて兩人其處へ坐り兼光見られ
 る通り此處は中庭を挟んで離れたる小座敷周囲も此の通り手
 廣のこのゆゑ誰一人あつて立聞をする者もなしア遠慮なく
 話をして戴だきたい村正念の入つたること有難く存じな
 す然らば一通りお話しをいたしますが私は此度日本全國を
 いて諸國の名刀鍛冶の流儀を見て己れの助けとなし且つは諸

名 羽 村 正

國の名所舊跡を見て置きますれば子孫への傳へ話にもなること
とて相摸國を獲足いたし五畿七道を往來して其の一の宮神
社佛閣等おしなへて參拜いたし此の山陰道へ入りましたはま
だ近日のこととそゝりて一大事と申すと仰々しきやうにはござい
ますが一通りお聞き下さるやう茲に下野國柳田の郷士に柳田
重平次正時と申す者がございまして妻を織尾と言ひ其の間に
出來ましたるのが最前一寸お近付きを致しました彼れなる歌
代と云ふ十三歳に相成る少女此の少女の祖母萩野と申すが同
道いたしたる老婆にて中々心ゆかしき人物様子を聞いて見れ
ば伴重平次並びに妻の織尾は同國八木宿の向ふ統の政八と申
す破落戸の爲に圖らずも利根川縁の堤に於て殺害され如何に
も無念のことなるに依つて逆縁ながら伴や嫁の仇を討ちたい
何うぞ孫の歌代に助力をしてと故郷を立出で、諸國を廻廻り

名 刀 村 正

丁度私が播磨國四山坂の難所へ通り掛りし時今の老婆が急病
を起し苦しみをりて難儀の様子之れを見捨て、行くことも如
何と心得種々に介抱してやりたれば病氣も漸く治まりました
それより過去未來の話しに移りし其時に仇人を探ぬる由云々斯
うと聞いて如何にも氣の毒に思ひ縁なき衆生は度し難し縁有
ればこそ先方も隠すべし話を私しの如き者を力に思ふて申す
こと殊に當人が申すには浪華の津に於て易者の申すに山陰道
に參れば必ず其の仇人に出會ふことあり且つ力になる人を得
て其の節本懐を達すべしと云ふ依つて先づ當國へ参つて先生
のお力を拜借いたし破落戸の中を探ねなば潜んでゐないとも
限りませぬ誠に入りますすが宜しくお助力下さるやう右の仇
人下野國八木宿向ふ統の政八なる者の人相書は是れにござい
ますと昨夜泊りし旅籠屋にて認めたるを衆光の前に出す衆光

名 月 村 正

は取上げて暫らく見てをりましたがハタと膝を打ち兼光を
れこそ實に出来たこと相模國にをりし頃より其方の櫛子を
見てはア、義侠に富んでゐなざる人必ず後來は名も揚げて道
れ鍛冶職の中にも此の兼光が其方の胸をしてをつた位之れを見
て正宗殿にも此の兼光が其方の胸を押戴いて見てあれば若し
られよと一書を取出して村正に渡す押戴いて見てあれば若し
其の地へ門人村正事罷越し候節は拙者に代つて宜しく教訓な
し恐きことは之れを避け善きことを勤め何うか當人の殺氣の
抜けるやう其許のお力を以つて万事のことを相頼むと云ふ極
く短文ではございませすが弟子を思ふ正宗から兼光の名宛にし
て我身のことを頼みの文言村正は暫時見詰めてをりましたが
其の手紙の面に「ハラ」と涙を落し村正私しの如き者を師
匠正宗殿が斯くまで思ふて下さるとは實に有難きことにござ

名 刀 村 正

いませす我身に比較べて申す譯ではございませぬが何うか此の
先き右仇討のことを宜しく願ひ申上げます兼光委細承知
いたした然らば私しも自身に探ねもするが當國には随分義侠
に富んでゐる人も澤山あることゆゑさう云ふ人に事の次第を
打明けて頼んだならば必ず先きに立つて世話を焼いて呉れる
であらう併しなから何事に依らず能く臆を練つて事をしなけ
ればならぬ餘り騒ぎ立つ様子があつては却つて宜しくないか
ら何しろ當分私の處にゐなざるが宜い村正有難うございま
す何うか何分願ひます備前兼光が請合つて呉れたのは鬼に金
棒こゝで村正から老婆萩野に其の次第を申しますと當人も大
きに喜こんで其の厚き芳志を謝し老人に似合はず忠實しく女
中代りに能く働きますから兼光も氣の毒に思ひ年を老つてゐ
なざるから何も勝手のことや其の外して呉れぬでも宜いと首

名 刀 村 正

ふが萩野は決して骨惜みもせず、こらも男
の食客は何となく不精なものに聞えますが女の食客と云ふ者
は男と違つて総じて細い所へ氣の付くものでございませう、さて
村正は毎日彼方此方人を相書を懐中に入れては探ね歩き其の
人相書に似たる者があるとか能く見るが横顔が似てゐるとか或
は眉毛の樣子が似てゐるとか云ふ位で額に一つの傷があつ
て巨蟒の文身をしてゐる者は更に見當らぬすると茲に備前の
國内で一の宮を安神の宮と申しまして土地の人は大層力を入
れて祭禮を致します丁度昨日今日は祭禮のことゝて大變の賑
ひでございませう所が兼光の門人に兼重と云ふのがありまして
此奴は仕事をすのが大嫌ひでお酒が好き其の中に取別けて
好きなものは何だと云ふと婦人で片時も側に女がゐなければ
面白くないと云ふ随分怪しからん人物でございませう 兼重先

名 刀 村 正

生唯今歸つて参りましました昨晩は明けまして誠に相濟みませぬ
兼光も叱言を言ひ盡して仕舞ひましたから別に叱りもしない
で「コリ」笑ひながら茶を呑んでゐる然るに毎日は酒の氣の
失せない男だが今日に限つて此の兼重が何たが變な顔をして
茫然としてをります何しろ一の宮のお祭禮で若い衆の中へ還入
つた姿と見えて目立ちまする衣類を着てをりまするが所々が
破れて泥だらけになつてをります 兼光「兼重 兼重へ」兼光
昨日今日はお祭禮日であるから其方は相變らず酒でも呑んで
女の手でも引張りながら彼方へ「ヨロ」此方へ「ヨロ」する
のが毎年極つてゐるが今日は大層静かだな小遣錢でもなければ
ば乃公がやるから何うか見苦しくないやうにして呉んな何う
も業の出来る者は怠惰者と昔から言傳へてゐるが其方は乃公
の家でも役に立つ男だから呑むなぢやアない酒は呑むべし吞

名 刀 村 正

まるべからずと古い人の言つたことは決して反古にはならな
い早く女房でも持つて堅くなつて呉れなければいけない何
まで人間は二十歳代と云ふことはねえから……兼重左様で
去年までが二十歳代でございましてが今年からは三十歳代に
なりました兼光さう云ふ減らす口を言はなくつても宜い様
木ぢやアあるまいし後とへ年を老るやつがあるものか 兼重
私しは酒を飲み女好きの方だけれども何んなことがあつても
博奕なんぞは以來決して致しませぬ實は二三人の友達に誘は
れて長船の勘九郎さんの賭場へ参りました所が不圖したこと
から間違が起つて一人の奴がいきなり私しの頭を殴ちやがつ
たので先生の前でございませすが私は力がありませぬから側に
ゐる奴を片づ端から喰ひ付きました 兼光何故其様な悪いこ
とをするのだ 兼光其の中に勘九郎さんが出だ来てヤイ兼光

名 月 村 正

さんの家の者を其様に酷いことをしちやアいけねえと一言
けると私を取巻いてゐた奴等は皆んな逃げて仕舞ひましたさ
うすると私は急に強くなつてア何でも持つて来いと威張つ
たんで其の時の様子は勇氣勃々として動かさること恰かも須
彌山の如く……兼光餘計なことを言ふな 兼重所へ客人と
か云ふ人が出て来てア宜い何うか俺に任して呉れと仲裁に
道入つたので其の人が片肌脱いだ所を見ると好い女身でござ
いましたよ巨蟒がバックリ口を開いてゐる所でそれに顔に大
きな疵がございましてすると勘九郎親方がイヤ政八さん大
に有難うございましてナニ若い者等が祭禮で一杯機嫌殊にあ
の兼重と云ふ人も酒を飲むと獅子が狂ふからと云ふことが私
の耳へ透入りましたそれを一杯飲ませるからと云ふので其
の疵をしておる所はそれつきりになつて酒の座敷へ透入し

正 村 月 名

ました酒肴を澤山出しましたが私は肴は餘まり食へませぬが
れども酒を十分に飲んで参りました何うか濟みませぬけれど
も先生十兩ばかり貸して下さいました子分衆へ肴代とでもして
やりてと思ふのでございませぬ 兼光兼重頼に疵があつて巨
蟒の文身をしてゐる男と見たと手前を吐いちやアいけない
ぞ 兼重ナニを吐きはしませぬ 兼光何うだい村正……
村正して見ますれば勘九郎さんと云ふ貸元さんの所にいか
ま政八と云ふ人がゐるものと見えます 萩野ホンにまア日頃
信心を致します故郷の足利大日様の之利益又富國へ参りま
して朝な夕な一の宮へ一生懸命祈つた甲斐がございませぬ
兼光イヤ此の兼光が考へても確かに神の威應ましゝたる所
然らば斯う致さう勘九郎と云ふ人は此の祭禮の世話役に出て
ゐるから是れから私しが一寸祭禮の交際に顔を出し向かに事

正 村 月 名

よせて其の政八と云ふ者の様子を見て来やう併し老母お前
さんは其の政八と云ふ者を知つてゐるでか 萩野左様でござ
います私しも存じてをりますますが先方の方が私しの顔を能く存
じてをります 兼光それは危ないそれちやアお前さんを同道
する譯にはいかなない何し私しが行つて探つて来ませうと支
度をして兼光は供をも連れず唯一人やつて参りましたのは長
船の勘九郎の家 子分親方殿治屋の先生が来ました通常の野
鍛治のことなどは親方とか親分とか言ひますがモウ孫左衛門
尉兼光と言へば大したもの此の人の顔を見ると皆な先生と云
ふ位ゐでございませぬ自身に立つて参りました勘九郎 勘九郎
れは先生能くお入来なさいました何うぞ此方へ 兼光貸元と
発なさいと上に通りまして 兼光此の度は親分も若勢で好
い鹽梅に間違なきもなくお祭禮も大層美事に出来ました 勘

名 村 正

有難うございませう。兼光、是れは些少なから何うぞ乾兒衆に上
ひて下ましますやう尙ほ又私し共の兼重の爛酔漢が相變らず
食充入之趣介を掛け殊に此方のお若い衆と間違をしたとか云
ふことも無き迷惑でございませう。勘九、なんの其様な
ことをなす。無用のこと雖も酒を飲む人は何か其處に製つたこ
れを飲んだら面白くないと此諭にさへ言ふ位ぬ杉は直ぐ松は
七、七と申して酒を呑む人は皆なさう云ふものでございませう。決
して兼重さんばかりではございませぬ。それに平常博奕場へ遊
びに来るゐなすつても決して手出しをしたことのない兼重さ
ん何か氣に障つたことがあつたと見え一言二言言つてる中に
立廻りが始まつたのでそれから私しが出て行つて静かにしる
兼光さんの家の兼重さんを調手に喧嘩なんぞをしてはいけな

名 村 正

いと一言、兼光、掛けたら家の奴は皆な逃げて仕舞ひましたさう
すると兼重さんが威張つた。此の備前の團内の奴は強らさ
對手だを領主でも何でも恐れやアしね。と言つた時にはさう
も恐ろしかつたので……何にもございませぬが何うか一杯召
上つて下さい。兼光、それは有難いことで誠に兼光のことでは
始終私しも困つてをります付いて此方にお客様が来ておゐで
だとか云ふことで何方へかお出掛けになりまじしたか。勘九、ア
、客人でございませうか何かご用で……兼光、ナ、外のことで
ございませぬが兼光が此方の乾兒衆と喧嘩をした時に聞へ
入つて口を利いて下すつたと云ふこと一寸お目に懸つてお
禮を申上げたいと思ふのでございませうから何うか會はして下
さいませ。勘九、ア、左様でございませうかナ。其様にぞ叮嚀な
ことは要りませぬのに……兼光、ナ、弟子の粗勿は矢張り私

正 村 刃 名

しの粗勿も同じことでございます 勘九相、雙らず先生のお
堅いのには恐れ入りました……ア、誰かおねエか客人を一
呼んで来て呉んな、膝兒が立つて呼びに行くと暫らく経つて其
處へ遣入つて参りましたのが例の政八、勘九、ア、客人何うぞ
此方へ……先刻若い者が騒ぎ立つた時に貴方が間へ遣入つて
口を利いて呉んなすつたので、穩かになつたあの兼重と云ふ人
は此方の師匠さんで、音に響いた當國の長船兼光と云ふ先生私
とは兄弟同様の仲何うかお近付きになつて下さい兼重さんが
貴方にいろく世話になつて辱しけないとお禮かた、此處
へ來なすつた政八、是れはさうも名も知れぬ私しへぞ、吓味
なぞ挨拶では却つて恐れ入ります始めてお目に懸ります私し
は下野國八木と云ふ所の者で政八と云ふ微力な男以來何うか
お見知り置かれて宜しうと別懇を願ひますと自分の口から下

正 村 刃 名

野國八木の政八と云ふことを名乗つたから兼光は腹の中であ
、確かに是れに違ひないと思ひ、兼光ア、左様でございます
か何うか以來は宜しう願ひたうございます甚だ失禮でござい
ますがお近付きに一杯献じませう、政八、是れは恐れ入りま
す然らば、取敢いたしますとそれから互ひに盃のやり取りを
致し、諸國の名所の有様なを物語り世の中の噂などを致して
をりますと其處へ勘九郎の乾兒が出て来て、〇、お客さん今迎
ひに來ましたから何うぞ一緒に御行でなすつて下さい、勘九
それでは政八、貴方に任せましたあの賭場何うか一つ出掛けて行
つて宜いやうにして呉んなさい、政八ア、左様でございます
かそれぢやア、貨元を宛を築むつて行つて参りませう、馴れませ
ぬから些と勘まるまいかと思つてゐるので……、勘九、目く言
つてゐるぢやア、行つて呉んなさい、政八、それならば中坐をい

名 村 正

たします……富國の先生どうも失禮をいたしました、ご機嫌よ
ろしう 兼光大きに失禮いたしました行つてござらつしやる
やうそこで取入は勘九郎の乾兒を連れて出て参ります、あとは
勘九郎と兼光が差向ひ側になた者を退かした上で、是れ云
々の至りで男と見込んで勘九郎貸元に此の兼光が頼むのだが
何と承知をして下さる譯にはなりません、か勘九郎は之れを
聞いて脱組をいたし暫らく考へてをりましたが 勘九郎宜うご
さいます私に見たやうな者を男と見込んで頼むなと其様な
言葉は要らぬこと、あの人は私しの所へ来てまだ一年とは経た
ないが何でも蓄悪のある奴と見てゐたので付いては直ぐにと
言ひて、今夜の博奕は一年の生活を付けるだけの取人があ
るのでそれを今こゝで直ぐに譲られて仕舞ふと何しろ五百と
千人前後の乾兒を持つてゐるので私も賊に困る付いては濟ま

名 村 正

ないけれども夜の子刻の鐘の鳴るまで何うか當人の生命を助
けて置いて置きたいもので其の代り私しが手引をして今夜の
博奕が濟んでの歸途あの松並木の上の所へ宜しく手配をして
其のお方々にお待受けを願ひ私しは乾兒に吹込んで忽ちグル
と人矢來を組み逃さぬやうに前後を圍み其の娘子とて老母
に助力をして上げませう 兼光それは勘九郎さん賊に有難い
ことでお禮の申しやうもない位、それならば宜しう何うかお
頼み申します、最早日の入相時になりましたとんだ長居をいた
して濟ませぬそれでは、死を覚悟ひります、是れから兼光は
己れの宅へ戻つて参り右の次第を一同の者に話しを致したか
ら老母並びに歌代と云ふ娘め子供ながらも勇み進んで暮こび
ました
此方は例の勘九郎自分の乾兒の源十に助八、又五郎或は富藏な

名 月 村 正

と云ふ皆な勘九郎の左右の腕と頼む若手の面々を集めまし
て是れ云々他人さんの困ることを助けて置けば自分の身
にも必ず善いことのあるもの人間は生涯の中に隠徳を施して
置けと云ふ教訓もある位わ一口に博徒破落戸などと云ふ者は
了簡がねと云ふ言はれるのは誠に口惜しい金銭を玩弄物のやう
にして年中絹布に包まり起きては時分に起きて寝ては時分に
寝るなんて盛氣の人の眼から見れば仕様のねと奴と思ふだ
らうが併し斯う云ふことに此方等が一生懸命先立つて肩を入
れて置けば日頃の悪いことも幾らか消えて行くのだから皆な
も何うか骨を折つて呉れると流石は上に立つ親分が言ふこと
でございませすから一同の者も委細心得ましたと引受けたサア
斯うなると取逃さないやうに悉く手配を致しましたとそこ
勘九郎の方から兼光の所へ打合せがあつたから此方もそれし

名 月 村 正

十分支度をして出掛けて行くこゝで勘九郎は賭場へ参つて博
奕を終ふのを待つてゐてすつかり跡片付けをしてから丁度子
刻時分政八と連れ立つて来る勘九郎大きに客人を苦勞だつた
政八「イニ何う致しまして貸元今夜の博奕は大したもの千兩
の寺口なんてユのは始めて見ました併し多分に頂戴して御み
ませぬ勘九郎何んの何うか遊んでゐて下せユ來月の三日の賭
場は又千兩以上の寺口が上がるから……それはさうと此處の
並木は少し歩かねユで待つて貰ひてユと言ひながら乾兒の者
に眼でもつて知らせましたから忽ち政八の周囲を多くの乾兒
がクルリと取巻く一足後とへ退つた勘九郎左方の手に脇差を
持ちまして四邊へ目を着け油断なく勘九郎政八せんか前
に首つて聞かせることがあるから一寸待つてお呉んなせユ外
のことでもねユが其方が圖にゐる時分同じ下野國柳田の郷士

名 刀 村 正

柳田重平次正時妻の織尾を利根川堤の傍らで斬つて棄てたる
其の儘に故郷を離れて此の國に來たことは確かに覺えのある
べき筈實は其の夫婦の間に出來た歌代と云ふ今年十一歳の少
女が親に對して孝を盡し其の夫婦の爲には現在の親萩野と云
ふ老婆が六十歳以上でありながら孫の手を引いて當國へ來り
兼光と云ふ人を頼んで私の許へ懸念を結び其方が舊懸漸やく
分り祭禮の賭場の歸り掛け此の松並木まで連れて來たのは兩
人の者に討たせる爲め四邊も森と穩かに往來の人の途絶えた
る所も名に貸ふ千本松原討つ討たれるは時の運覺悟を決めて
率さ此處で敵を討たれてやつたならお前も立派な男の魂此の
長船の勘九郎も縁有つて知合となつたお前のこと死んで倒れ
た其の後とは骨を捨ふて野邊の送りは立派になし永代回向處
たりなく先祖同様にしてやる程に未練な心を出しなさんな覺

名 刀 村 正

悟をしなさい政八殿……イヤ兼光殿其の方々をお連れなさい
と呼はつた之れを聞いて孫左衛門尉兼光は先に立ち其の後と
より仙吾村正相並んで歌代の手を引いたる老婆萩野禰鉢巻甲
雙々々しく細身作りの一刀を掲げたるは村正が踏て銀へし一
刀を是れなる老婆に與へたるもの孫の歌代に兼光は一尺三寸
の一口を今宵の差料にと渡したり政八は之れを聞いて思はず
ヨロ／＼と踰跟めさしがウンと足に力を入れ木の根に片足踏
掛けて八方へ眼を配り政八オウ如何にも貸元の言ふ通り我
身に確かに覺えのあること今は決して隠しはせず如何にも尋
常に討たれてやらうサア其處なる老人並びに小娘思ふ存分敵
を討てどヒラリと体を開いたることにして用意の一刀引抜い
たる様子中々十三歳の小娘に四十男を討てる筈はない老母は
一刀引抜いて其處に進み出で萩野逆縁ながら悴や縁の仇覺

名 刀 村 正

悟をしる言ひつゝ、斬込むを心得たりと暫らくは丁々發矢と
新結ぶ流石に老婆は武家出の者なれば腕前確かと覺えたり此
の時村正は後ろに在つて様子如何にと見てをりしが氣短なる
急買とて今は堪らす長い勝負をさせるは面倒と心得氣合を
つてエイと一躍投げた藥は物の美事に政八の眉間に當りヨロ
くと踰跟めく所を透さず老婆は政八の左身の肩先深く斬り
込んだから血煙立つてドウと倒れる此の時孫の歌代は走り出
で父様母様の敵覺悟をしる言ひながら子供ながらも力一杯
胸腹へグツと突込んだから何かは以つて堪るべき息も絶え
になつたる様子其處へ乗掛つて老母は孫の手を叩いて暫し賞める言
めを刺した此の時見てゐたる人々は手を叩いて暫し賞める言
葉は止みませぬ位誰が知らしたか一の宮の並木で敵討があ
ると云ふことを聞いて土地の者は提灯を点け松明を掲げ多人

名 村 正

敵此處へ集まつて來ました其の中に兼光よりして此の趣きを
之領主へお届けを致した當國の領主左衛門尉高國殿之れをお
聞き遊ばして大きに感服遊ばされ厚く兩人へご恩賞を賜は
りました是れよりして一同兼光の許へ引取つて参り改めて萩
野歌代の兩人より村正兼光勘九郎等に厚く禮を述べる村正よ
りも兼光並びに勘九郎の骨折を悉く謝しましたさて政八の
死骸は約束の通り勘九郎が引取りました已れの菩提所へ葬む
り厚く回向を致してやりましたさて老母萩野孫の歌代は兼光
始め村正等に別れを告げ故郷下野國柳田の郷へ歸り其の後足
利家の重臣高倉兵衛尉正義と云ふ者の次男正國を歌代の婿と
致し足利家の家臣となつて柳田重平次の家を再興しました子
孫代々繁昌いたしたとのことでございます村正は是れよりし
て備前兼光の手許にゐて委とく當國の流儀を見抜きそれより

山陽道を廻り尚ほ四國九州を経て神社佛閣を殘らず参拜いたし追々口敷を重ねまして再び京都に趣き久し振にて堀川國廣の許へ参りましたさて此の行先き如何相成りませうか一寸一息吐いて申上げます

第十席

名 勇 村 正

「日の本は岩戸神樂の始めより女ならでは夜の明けぬ國京都表は畏れ多くも十善萬上の帝在するお膝下ゆゑ京都に住める女は萬事の禮儀正しいことは都の婦女子を見て物言へと云ふことを昔の人が筆の跡にぞ遺しました此の堀川と云ふ所は京都一の又人氣穩かな所でありまして堀川國廣と村正とは兄弟の約定を結びました間柄で村正が三十歳になつたならば國廣の妹松江を迎へて夫婦になる」と云ふ約定をしてございませす勿論

名 刀 村 正

鍛冶職とは言ひながら村正は義侠心に富んだる物堅い人でございませすからそこで一旦國廣の許へ戻つて來ました此の時國廣も大きに悦びまして長谷部國重も此の中に加はり目山度婚の式を濟ませました然る所が間もなく松江は村正の胤を産し其の翌年月滿ちて安々と男の子を生落しました自分喜左右衛門と云ふ名前前に改めてゐましたから太郎正俊と名を就けました月日の經つのは早いもので此の正俊が十一歳に相成りましたとき即ち明德三年九月のこととございまして村正は女房子供を連れて諸國を廻つて見たいと云ふ考から國廣に別れを告げて奥羽五十四郡を右方左方廻り尚ほそれより致して圖らずも下野へ還入つて柳田と云ふ所に至り過去りし備前の一の宮の敵討ちのときに柳田重平次の老母に力を添へたこともあるから是非今一度見廻つて見やうと根が深切の村正のこと

名 刀 村 正

ゆゑ親子三人でやつて参る最早夕暮れ時此處は名代の奥州野
州の國境丁度唯今境の明神の森際を目掛けて参ると助けて呉
れ一助けて呉れると頻りに大聲をあげてゐるさうかと思ふと
「チア構はねへやつて仕舞へ構はねへから斬殺して早く金を奪
取れ」と大勢にて一人の旅人を取巻いて苦しめてゐるから見衆
ねて村正が此の中へ突然飛込んだ大勢の奴等は驚いて
奴等を邪魔する」と一人の奴が村正に打つて掛るを村正は素よ
り力盡は勝れてゐるし技倆も達者でございませうから少しも驚
かず体を換はして其奴の襟袵を引掴みスデンドーと大地へ投
付ける此の有様を見るよりも破落戸は驚いて八方から村正を
目掛けて掛つて来るを彼方へ投げ此方へ倒しトツ／＼皆叩括
へましたから「〇ヤア敵はねエ是れは化物だ人間ではなから
う」と木の葉の散るが如くに一同逃げて仕舞ひました一息吐い

名 刀 村 正

て向ふを見ると彼の旅人が神木の根元に打倒れて眼を廻はし
てをりますから村正が「〇是は氣の毒な旅人が氣絶してをる
から私しが行つて助けて遣るに依つて松江やお前は手洗ひ水
の水を柄杓に汲んで持つて来て貰ひませう 松江ハイ畏まら
ました 村正「悴や其方にある品々は纏めて置けよ 正俊「父さ
ま畏まりました 太郎正俊は荷物の散つてゐるのを拾ふて片側
へ持つて参ります早くも村正は用意の籠を出し旅人の口の中
へ之れを入れて水を射込み確り致さなければならぬ 松江「コ
レ旅のお方お氣を確かにお持ちなさい 旅「ハイ有難うござい
ます 漸くマア氣が付きました ございませう 貴公様が出て下さつ
たのは眼に還入りましたが何しろ餘り大勢の爲めに打つたり
叩かれたり私しは何んなことがあつても此の金を取られては
なるまいと思ひましたのでございませう それをマア宜い鹽梅

名 刀 村 正

に貴公のお賜けを受けまして危い命を取留めました 村正何
 でした今のは…… 旅人左様でございませす彼の者等には前の
 日の夕刻一緒にになりまして私と此處まで参つたのでございま
 す何を秘しませう私には上総の國妙見山の山下にて上総屋傳
 兵衛と申して宿屋渡世を致してをりませす者で 村正成程 傳
 所が先達女房が産を致しますときに頗る難産でございまし
 て困却いたしましたそこで奥州鹽竈明神様へ何うか苦しみを
 去つて安産をせしむるときには屹度お禮参りを致すと水を浴
 びて私しが祈りましたら不思議にも其の中に苦しみは取れて
 頗る安産でございませましたそれから早速お禮参りに出やうと思
 ひましたたがどうも店が忙しうございませたり何分にも手前の
 身体に暇がございませぬので出掛けることが出来ませぬ併し
 苦しいときの神頼みをするのは本意でないと思得それから

名 刀 村 正

ア女房と話を致し店のことを頼み置きました漸う 此度手
 前が一人初旅奥州の鹽竈様へ参詣いたしそれから松島金山
 乃至は多賀城の石碑脚間が岡或は伊達の大木戸等残るかたな
 く見物も済ませまして歸途件の胡魔の蠅に出會ひました此處
 まで来る暇がございませぬ大勢が私しを取巻きましたのでナニ深山も
 ない金でございませすからそれは取られても仕方がないけれど
 も中にございませすは松島金山華山の金の塊り是は向ふの懸意
 なお方から貰ひましたので之れを取られてはならぬと思ひま
 したから一生懸命に胴巻を押へてをりませましたそれ故に大勢で
 私しを殺せだの何のと言つて苛ひ苦に遇はされませした 村正
 ハア左様でございませぬたか何處か怪我はなさらぬか 傳イニ別段
 怪我もございませぬ 村正それはマア宜かつたして旅のお方
 には是れから何處へお歸り…… 傳ニ私に是れから本國上

名 刀 村 正

総の妙見山の下へ戻りますので、村正「ハア左様でございますか、それでは何れ又貴下にも會ふことに致しませう。傳如何でございませう。見苦しうはございませう。今夜は此の宇都宮の本宿に徳田屋金右衛門と云ふ旅人屋がございませう。是れは私と兄弟でございませう。恐入りますか。此れへ一泊を願ひます。村正「それならば如何にも同道申しませう。傳「是れは何でございませうか。貴公の子息さんで、村正「左様、手前の悴……傳「失禮でございませう。貴公様は職人でございませうか。村正「能くお當て下さいませう。手前名前を申さぬで失禮いたしました。私しは相模國の五郎正宗と云ふ者の弟子で、喜左衛門村正と申します。者でございませう。以來どうかお見知り置きを願ひたい。傳「ハア左様でございませう。かそれは結構、宜しいことでございませう。貴公は大層雄俊のお方で

名 刀 村 正

マア何れも世間の話を聞くと人の困ること、見ると貴公はお助けなさると云ふどうも實に察いお方で……村正「是れは、タリ些細なことを其の様に仰せられては甚だ恥入りませう。傳「どう仕つりませう。何しろ被入しやるやう是れは内儀さんで、談在しやいませうか。種々マアお良人様に厄介になりまして、誠に有難う存じます。松江「どう致しまして。良人は物好きでございませう。鬼角他人様のこと、云ふと仰へ遣入りたがります。ア、レが病氣でございませう。傳「どう仕まつりまして、誠に世話様になりませう。と上総屋傳兵衛は大層悦びこゝで、傳兵衛の案内にて宇都宮の本宿、徳田屋金右衛門方へ泊りませう。そこで傳兵衛が徳田屋の主人に一伍一什の話をすると、亭主もそれへ出て参りませう。金「此度は種々手前兄弟の傳兵衛がお世話様になりませう。お禮の申上げやうも、ございませぬ。と客商法待遇に

名 刀 村 正

ぬかりはない別して村正夫婦の太郎正俊には厚く世話を致し
しす立たうと思ふとせうかお願いでございませうから今日
日せうかモウ一日と留められる、それが爲めに遂に十日ばかり
此れにをりました丁度十日目の晩金右衛門が村正のゐる部屋
へ参りまして金扱て昨晚お話をございませうした柳田へお訪ね
になるよ云ふが當時は其の柳田重平次様は都勤めで此方はお
留守居様ばかりで今では足利様の家老か何かをして被居し
やる賊にせうもお立派なことでございませう村正ハア左様で
ござるか留守と云ふなら訪ねた所が致し方はない然らば是れ
より手前共夫婦出立を致さう側に聞いてゐた傳兵衛がせうで
ございませう、それならば一つ手前が案内をいたしますから
上総の妙見山へ参詣旁々手前共へお出でを願ひたいもので
此の時女房の松江が貴下折角を深切に上総屋さんが仰有つて

名 刀 村 正

下さいませうから左様遊ばしたら何うでございませうとの勤めに
村正も未だ房給は見えたことがございませうから村正それで
はせうかと一緒に頂はうと云ふ幸ひに徳田屋金右衛門も上総
まで用事がございませうから其の明る日此處を立つことにな
りました、そこで夜が明けましたるから五人連れにて宇都宮を
出立に及び道中別段滞りなく上総妙見山下へ到着を致す早
速に傳兵衛が此度の出来事を女房にも話を致しましたから妻
のおしなは悦んで村正夫婦子供までも宜しく待遇す徳田屋は
妙見様を参詣しお札供物の願を置き三日程足を留め村正夫婦
に別れを告げ傳兵衛にも暇を告げて是れは故郷宇都宮の本宿
を指して戻りました此上総屋傳兵衛と云ふ人は手廣に孫店だ
の或は地面を澤山持つてゐる者でございませうから或日村正に
向つて傳せうでげす先生貴公は是れから他へ被行しやらな

名 刀 村 正

いで此様な所でお宜しけりやア直ぐ此の所の隣りの家が明い
 てをりますから遊慮のない所がお宜しうございます當分
 マア當國に足をお留めになつては如何でございます之れを聞
 いて思はず村正も悦びました村正それはどうも有難いこと
 でお禮の申上げやうはござらぬならばお世辭序でに私も當國
 には別段同業者がゐないやうでござるから店を開いて見ませ
 う傳先生それがお宜しい此處で村正は傳兵衛の世話にて店
 を持つ妻は針仕事の指南を致します此の松江は京都で育つ
 たいけありまして裁縫も一通りは習ひました讀者諸君もご案
 内の通り方今は和服と云ふものが服に後になつて何でも西
 洋服の方が前さになつてをるやうに見えませ併し日本の本はど
 うしても古代の装束と云ふ物は極く大切なものでございまし
 て古風の式儀は何處までも破れませぬそこで女中衆が此の裁

名 刀 村 正

縫と云ふことを致しますは誠に見好いものでございます三
 味線は弾けるけれども襟袋一つの縫ふことの出来ないなご云ふ
 ことは是れは講釋師の女房などには皆あるものでございます五
 布風呂敷の大きいのを持つて来て中央に鍋の蓋を當行ひまし
 てグルリと其處を切抜いて穴を開けて其處から亭主の首を出
 させて糸でギユツと結いて仕舞ふまゝで酸漿の化物みたりやう
 なものが出来ませ随分講釋師の女房が着物を縫ふと恐ろしい
 妙な物を拵へませ所が村正の家内は何から何まで能く出来ま
 すそれ故に開けない所でございますからサア庄屋の娘だの奎
 左衛門の娘だの諸方から村正の家へ参つて家内から針仕事の
 教授を受けますそれでは月謝は幾ら取らなければ致へないなご
 云ふことがございませぬから誠に盛つてをりませ此の松江
 は京都人の慣ひとして又琴或は琵琶の類なごも覺へました此

正 村 刀 名

の日本へ琴の渡來りせしたの人は人皇四十二代文武天皇の御宇
唐の都から日本へ琴を持つて参りせした、して見れば大和琴
と云ふことを申すのは此の天子樂の之歴代から行はれたもの
でございまして糸が十三本ございするが何しろ美しい音が致
しませるもので所が寶歴年間山田檢校と云ふ人が山田流と
云ふ流儀を工夫せした此の山田檢校が一口琴歌を秋にかた
とつて拵へたのが今日遣つてをりませす其の文旨に心さびしき
冬ともり風の便りの言の葉は霜にもあれず散りもせず、コロ
ンシヤン、是は餘計なこと、それ故に松江はお弟子の中に琴を習
ひたいと云ふ者があると教へませす斯様に夫婦共に稼いてをり
ませすゆゑ村正の家は富貴になりませしたから上総屋傳兵衛夫婦
も大層悦んでをりませした茲に鎌倉表に於て相模守正宗は六十
一歳の聲を聞くまで身体健全でございませす子孫繁昌いたする

正 村 刀 名

爲めに其の身は中年後に剃髮をして寶龍齋と名前を改へまし
た此の正宗の娘にたがねと云ふのがありませして之れに江州高
木の住人彦四郎貞宗を配遇せて婿と定めませした又四九郎正親
と云ふ者を養つて之れを正宗が己れの跡目と頼みませした熟々
此の世の中を考へるのに己れが暫く心を込めて鍛上げた其
の刀は天下泰平國家安穩せしむる爲めに鍛へる所、人の命を矢
鱈に斷つを好んで鍛治職は鍛へるものにおらず正宗は穩かな
劍を鍛つことに心を込めた人でございませしたから正宗の刀を
見て悪劍と之れを言ふものはございませぬ左りながら名刀た
りと雖も持人が悪いときは無益に人命を殞すことも多くあ
るべく然らば是れより致して我が刀の爲めに命を捨た其の人
の善惡に限らず菩提を吊らう爲めに諸國を廻り神社佛閣、残る
かたなく參拜をして其の人々の追福を致さうと覺悟を極め若

正 村 刀 名

夫婦を呼んで一應話をすると、貞宗「尤もでございます、それならばお立ちに相成つても宜しうございます、行く先々より事
あれは宜しく便りを願ひます、正宗其事はぬかりなく致さう
と立振舞ひを充分いたし多くの弟子も國境まで見送りまし
た扱て運れたお弟子は正兼正義と云ふ二人が随ひましてそこ
で相摸國鎌倉を出立を致し順を逐ふて上総の國妙見山を參拜
いたさうと云ふので懸て還入つて参りましたは妙見山の手前
で宿町へ参りますると上総屋傳兵衛と云ふ大きな行燈がそれ
に出てをります、男お早いお着きさまでございますお泊りさ
までございますなら手前方へお泊りを願ひます上総屋でござ
います此の上総屋は留國さつての草分けの宿屋で皆知つて
をりますから正兼、三人でございます宜しくお願ひ申す
男畏まりましたとございます」正宗の草鞋を女中が取らうとする

正 村 刀 名

とお弟子の正義が其處へ來まして正義「ア、姉さん宜いから
さうか荷物だけを先さへ持つて行つて下さい」と師匠思ひの正
義が正宗の草鞋を取り足袋をお脱がし申し足を淨めて蓋上げ
る、正宗「大きに正義手数であつた、正義さう仕つりましてッ
ア兄弟子さうか先さへ上つて」と正義の草鞋を取らうとするか
ら正義「其様なことをしては困る」と自ら取りまして是れより
主従三人が座敷へ通りましたそこで帳場へ幾らかお茶代を出
す是れは女中衆へお祝儀を遣りました、モウ宿屋へ泊つたなら
ば一夜泊りでも世話を受けましますことだから是は客の思召しで
あらうが困らない人でございましたら何程か其家の召使ひ
に還ります此の位功徳になり又行届いて誠に宜いことと
ございます暫く経つと亭主が正宗の座敷の入口へ手を仕へまし
て「您お疲れたらまで唯今は又多分にお茶代を有難うございま

名 刀 村 正

すぞうかご最負を願ひますと一禮を遣ますから正宗は坐
り直して 正宗イヤを亭主を叮嚀でサアぞうぞ此方へ 傳を
死を嫌ひます 正宗大層此の家は空氣も長く通り又お庭もお
美事でございます 傳イエぞう仕つりまして無精でございます
すからイヤモッお目に留まるものもございませぬぞうぞ
くり遊ばしますするやう伺ひまするが明日はお早いのでござい
まするか並で宜しうございませるか 正宗左様ですな妙見様
を参拜を致さうと思ふから若し寐忘れでもしたらお起し下さ
るやう 傳委細心得ました兎角する中に之飯の支度が出来女
中が持つて参りましたから二人のお弟子は正宗の側の所で是
れもお酒を飲みながら越し方行末の話などを致してゐるモッ
と酒も好い加減に飲みましたから飯に移りました最早飯
も終つて女中はお膳を片付けて仕舞ひました暫く経つと正宗

名 勇 村 正

が「サア」お前方は先きへ眠むで下さい 正宗イヤ 左様でない
師匠さんお寝なさいまして…… 正宗イヤ 左様でない
れたらうから寐て下さい 正義を嫌ならを戴きますと次
ぎの座敷へ正兼正義の二人は枕を列べて旗の疲れに一杯横
好い心持に其の儘寝て仕舞ひました然るに正宗は二人を寝か
した後で間もなく床に臥りましたが餘り茶を過ぎましたので
眠られませぬから袋の中より小さい帳面を出し筆を執つて諸
所の名所舊跡を見物いたし種々の面白い説を聞いたまゝを記
してゐるとトアンカンと槌の音が激しく致す其の音が耳に
這入りましたから流石に名人の正宗でございまするゆゑ筆を
止めて耳を引立て膝に手を突き蒲團の上に座を占めながら尙
ほも聞いてゐると確に相州流の槌の打ち方 正宗世にも上手
な人もあるものかな何と云ふ人だか我が流儀を此の位に學ん

名 刀 村 正

であるとは願母しい人だと思ふ折りしも陰陽の穂を打込ひ其の穂の音の一番終ひの上げ穂へ来て打込ひ其の穂音を聞いて正宗アア一しまつた玉に傷惜いことをしたと腕組みをして肩に穂を寄せて考へてをりますと 傳お油を注ぎます宿の亭主でございませぬオヤ未だお客様お察み遊ばしませぬか 正宗はこれにございませぬか出で下すつた實は亭主に少しお話した

名 刀 村 正

様でございませぬ前には喜左衛門と仰有います 正宗喜左衛門……其の人は女見たやうな柔和き顔付きで物事堅固にして力もわり能く他人の爲めとなる義を振ふ人で若しや村正とは申しませぬか 傳アア能くぞ存知でございませぬイヤモウ他人の爲めと来ると誠に能く義を盡すお方で…… 正宗をれを聞いて嬉しうござつたさうぞ夜が明けたら貴公お手數でござるが宜しく仰有つて戴くことがあつたか隣りの生先に言ふませぬ 傳宜しうございませぬが併し何にか隣りの生先に言ふことがあつたら明朝貴公様が一すお出掛けに…… 正宗イヤ私しが會ふ譯にはいかぬ 傳ハハ一体それは何のことございます 正宗モウ少しで亭主此れへお進み下さい實は今お隣家で陰の穂を持つて打ち納めを打つべきに上げ穂を陽の穂を持つて致したるゆゑに惜いかな可憐名刀へ傷を拵へたさうぞ

正 村 刀 名

以來は必ずさう云ふことのないやうにして敷きたいと宜しく
 此事を申し傳へて下さるやうお願ひでござる 傳へて左様で
 ございまするか 正宗殊に今假へた物は何でも二尺以上の物
 で三尺はござらぬ長い物程尙ほ折れ易いからと斯うぞうと言
 つて敷きたい 傳へて一降で貴公様はアノ打込ひ穂音を聞い
 て被在しつてそれで分るのでございますか、どうも驚いたもの
 ですよ、へエ分りました、確に其の事は申しませう、大分夜更けま
 したお寐み遊ばせと云ひつゝ、亭主は其の儘店口の方へ行く正
 宗は一寐入りして夜の、ラ、明けに起きてご飯もソコ、
 勘定を済まして二人の弟子を連れて當國名代の妙見山を指し
 て参りました

第十一篇

正 村 刀 名

村正は元來早起きの人でございます、早起きは三文の利益があ
 ると云ふことを毎度申します、そこへ來ると藝人などは早起き
 のものは稀なるもので、況して私共講釋屋などは夜更けまで
 の稼業でございますから、何うしても早く起きることが出来ま
 せぬ併し、どうか怠らないで早く起きるやうにするのが肝要で
 ございます、比喩にも一日の謀事は鶏鳴に在り、鶏鳴に起きざれ
 ば日晡はにして即ち後悔す、それに相違ございませぬ、何でも朝
 は早く起きる方が、身体のためにも頗る好いこととございます
 女房の松江が其處へ茶を入れて持つて参り、松江貴郎が茶が
 入りました、村正それは有がたいと湯呑を取上げた、村正は至
 つて、瘧性の強い人でございますから、お茶を一ばい呑みながら
 も、細工場の方を頻りに見てゐるのは、鷹一つでも落ちてゐると
 氣にかゝるのでございます、殊に昨夜、鷹へ上げた黒打物、儲おる

正 村 刀 名

しも未だ濟まない此のお茶を一ぱい呑んで昨夜假えたものに
目を通さうと思つてをります所へ隣家の上総屋傳兵衛がやつ
て参り傳兵衛先生お早うございませう村正「オヤお隣家の旦那
チア此方へ毎度子供が出ましてはお世話さまになります傳兵
衛う致しまして私共の子供などは頑強で仕方がございませ
せぬが先生などはお仕込みが厳しひから悪い悪戯をなさいませ
せぬ子供は危ないことさへしなければ宜いのでございませう……
お内儀さんお早うございませう松江「オヤ入來つしやいませお
隣家の旦那様始終仲が出ましては種々お世話さまに相成りま
す傳兵衛何う致しまして來て下さると云ふと獎勵が付きまし
てございませう本を讀みましたりお手習なごを致します松江何
うもございませう本を讀みましたりお手習なごを致します松江何
たらございませう遠慮なく叱言を仰有つて下さいませう何うも困るので

正 村 刀 名

さいますよ此間なごはとんでもない失禮を致しました此方の
壁に火着で穴を開けて其處から竹を一本通して何か言つて
ので何うも悪いことばかり致します傳兵衛「オヤそれなごも私
共の野郎が皆な先きに始めるのでございませう併し危ないこ
とさへ致しませぬければ子供は餘りガミ／＼叱らない方が宜
しいやうに思ひます甚く頭を押へ付けて置きますと萎縮して仕
舞つていけませぬ村正「道理でございませう傳兵衛時に先生
昨夜貴方が假つたのはあれは二尺以上のものでございませう
之れを聞いて村正不審しく思ひ村正何うも旦那恐れ入りま
したな細工場で見つた譯でもなし昨夜來なさらぬに何處で
分りましたか傳兵衛それは自然に分りますナ村正「ハ、何
う云ふ所でお分りになる傳兵衛それは貴方何事も締めて已れ
の心が穏やかになつてゐる時は膝で何をしてゐると云ふこと

名 刀 村 正

が...とく能く分るものでございませぬ。殊に昨、夜貴方が鍛つたのは先づ餘程念入りのもの、それで此の上げ、越と云ふものが一番肝要で、けすな俗に謂ふ終ひ、越が然るに陰の越を以つて鍛ち納めをすべきものを陽の越を以つて鍛ち納めをしたのでございませぬ。僅かなことで之れを反對にしたばかりで、可惜な作物へ疵の出ることを知らない、弘法にも筆の誤り、河童の川流れと言つたやうなもので如何でございませぬ。殊に長い刀は、斯う云ふことがある、と割れ身いと云ふ何うも恨しむべきものではございませぬ。か「とべら」喋り立つた之れを聞く、と村正は見る。間に面の色が變り、物とも言はず上総屋傳兵衛の胸ぐらを、シツと掴んだ力の勝れてゐる村正に締められたから、傳兵衛、ア、痛い、是れは情けない、先生何をなさるんでございませぬ。何うか此處を放して下さい、村正「お前さんは旅籠屋商賣はか

名 刀 村 正

りをしなされる人と思ひさや、以前は何の何某と名前を知られたる鍛治職に違ひない、陰で聞いてゐて他入の鍛つたる刀に非を打つくらゐのお方で見れば、正しく由緒ある人、と心得た。ア、此の方の鍛へたる刀に對して、長い程折れ易い、疵が見えるな、と云はれては、職分に對して恥入ること、モウ其方を生かして置く譯にはいかぬから、と尙ほも締付け、るから、傳兵衛「ア、待つてお呉んなさい、迂濁り此様なことは言へないぞ、ア、痛い、い、何うかお内儀さん、此の手を放して、松江「ア、貴方が何が氣に障つたのだか、知りませぬが、お隣家の旦那を何で其様に手荒いことをなさるのでございませぬ、村正「エ、松江「其方の出る所ではないから、其方へ引込んでゐなさい、モウ此の上は何うあつてもお隣家のご亭主の生命は助けんと云ふのを漸やく其の手を振放して、傳兵衛「今のは、全く私しが粗忽な申しでと

名 村 正

實は私しが買つたのではないので、私しのは出店至たくは本家
本元があるののでございませすから何うぞ助けて下さい……ア、
恐ろしい目に遭つた朝飯前から咽喉締められのお目玉頂戴な
どと来た日には餘り好いものではないと言ひながら咽喉を擦
つて一息吐き、傳兵それでは村正殿お話をしますが昨夜私し
の所へお泊りになつたお客は年齢六十歳以上人品骨柄威あつ
て猛からず白い髭は胸の邊りまで垂れましてどうも頗る立派
なお方お弟子と云ふべき人は何でも一人が二十歳代一人が三
十歳代お師匠様と言つてゐたからあれは弟子に違ひないので
茶代も下すつたし女中にも心付けを下すつたすると夜半の頃
に私しが油を注ぎに行つたのは私しもお容様が大切だから夜
中には一廻り火の元用心又男共が女中の部屋なんぞへ行つて
悪戯でもするやうなことがあつては大切な人の眼を預つてゐ

名 村 正

ることゆゑ其様なことのないやうに其の邊へ心を注ぎて屹度
夜中には一廻りづゝ見て歩くので私しがお油を注ぎに参りま
したと言つた時に白い髭の生へたお方がまだお寝みになりま
せぬで私しに少し話があるど仰有るので何でございませす
くどか隣家は鍛冶屋さんだらうと言ふから左様でございませ
名前は何と云ふ人かと聞くから喜左衛門と云ふ人だと言つた
ら暫らく考へておゐでになりませした、それでは其の人は他人
の爲に信義を盡し女見たやうな容貌をしてゐるだらうと言ふ
からそれと違ひませませぬ村正とは申さぬかと仰有るから
能くご案内で言つたら涙組んでゐて隣へ手を突き坐り直し
て腰を潜め今銀つたものは云々斯うくと最前私しが申上げ
るやうに言ふので其様なことを私した言へど仰有るよりは貴
方が明日出立際に隣家のことだからお寄りになつて仰有つた

正 村 刀 名

ら何うでございませうと言つたらイヤ會はない方が宜いと仰有
つて今朝はどはまた此方で戸口を開けたか開けない中に裏手
の方を廻つて出て行かつしやいましてが何でも妙見山へ参詣
に行くことと云ふこととございまして此の事を私しが先刻お話し
る時に家に泊つたお客様が斯う言つたので先生お前さんには迂
此様な苦しい目には遭はなかつたので先生お前さんには迂
り何か話しが出来なない壽命を縮めて仕舞つた平常はコ
笑つて愛嬌のある人だ怒ると中々酷いや村正何と云ふそ
れではお前さんの所へ昨夜泊つたお老人のお客……ハア其
のお方は目元涼しく顔は長い方で人品骨柄威あつて猛からず
白い髭が胸元まで垂れてゐて六十歳以上鎌倉言葉がございま
したらうナ 傳兵ウシ其の通り 村正物言ふ時に膝へ能く手
を置いて言ふお方でございませうナ 傳兵ウシ其の通り 村正

正 村 刀 名

眉毛の右の方に黄子の目立つのか一つありましたか 傳兵ウ
シ確かにありました 村正然らばそれが先達つてお前様にも
話をした鎌倉表の相摸守正宗と云ふ私の師匠様 傳兵ウシ
貴所のお師匠様でございませうか 村正傳へ承たまはるに當時
は寶龍齋五郎入道正宗と仰せられる由であるそれでは妙見山
へお登りになると申すのか松江留守は宜しく頼むと俄かに焦
立つ仙吾村正向ふにありし昨夜鍛へし黒打の一口を白の木綿
にキリッかと巻き之れを腰に挟みし儘勝手馴れたる當國の妙見
山を指して一散に駆け来りさても麓を静かに登り上つた山
の中途小手を觸して見てあれば遙かの上には師匠正宗思はず
顔を見合はせしが村正は尙ほも駆け登つて正宗の前に來り白
の木綿に包みし一方取出して両手を突き 村正長らくの間お
目に懸らぬで之れありましたが益々勇健の体を拜し大慶に

正 村 刀 名

存じます又兩人の衆も能くお供をして師匠様の傍らを離れず
當國までも御出でございませうと改ためて申上げますが如何
なる次第を以つて何にも知らぬ旅籠屋の亭主に私しの銀つた
る刀に疵があるの穂敷の陰陽なぞ何故あつて他人へ仰有いま
したかそれ程を親切に思ふて下さるならば何故私しの家へお
入來あつて一言なりとも言つては下さらぬぞ餘りと言へば情
けなし折れるものを假へた覺えは更になし是れが折れるとは
如何なる譯か諸國の一の宮を參拜いたし此處彼處の名刀鍛治
の手に許に行き加減の秘密も覺えて工風を凝し當國へ參つて
三年餘り愈々此の年を経つたことならば久し振にて鎌倉へお
尋ね申してご機嫌を伺ひ且つは殺氣が抜けしか抜けざるかを
一口銀つた刀をお鑑定を願ひ事をしたいと思ふの際に何の男
科あつて昨夜銀えし刀に非を打ちしか其の事誓つて承たまは

正 村 刀 名

らんと涙を流して口説きたり正宗聞いて共にハラハラと涙を
流し 正宗然らば言ふて眼かせる會はざるは會ふに勝ならぬ
と存して故と其方に會はないで旅籠屋の主人に申したること恐
くと思ふて言ふたのではないなれども其方が昨夜銀つたる一
刀は確かにそれに相違ないイザ其の証據を見せて取らせる」と
袋入りの脇差を引抜いて右の手に持ち村正が銀えた一刀を左
りの手に持ちやがてヤツと一聲諸共に正宗が己れの一刀を村
正の刀に當てるかと思ふとポロリと其處へ切れたるは瓜茄子
を一つよりも早く 正宗是れを見られよ斯の如き有様なれば
是れにて疑ひは晴れたるやと言つてゐる中に今切れた其の切
口よりバツと煙りの如きもの立ちたりけり餘りのことに能る
いて村正はウーンと後方へ倒れました見るに見兼ねて正覺正
義兩人の者其處へ來つて介抱いたす折こそあれ女房の松江

名 刀 村 正

の太刀の...を引いて宿屋の亭主も共に駆け付け来り 傳兵衛
ヤ是れは昨夜のお客様お前様の爲に私しは此の村正殿に咽喉
を締付けられ酷い目に遭ひました」と愚痴を言つてゐる松江は
其處へ出て正宗と面てを合はせ 正宗「オウ其方は堀川國廣の
妹の松江でありしやな 松江さう云ふ貴方は鎌倉の伯父様で
ございませすか 正宗「イヤ久しく見ない中に大層立派なものに
なつた...ナニ是れが村正の倅とか惣領ゆゑ太郎正俊と申す
か...如何に村正能く聞き候へ是れなる松江は私の娘めのだ
がねと共に同じ乳にて京都に在りし其の時に育つたことゆゑ
乳兄弟されば其方は正宗の子も同じこと今此處で師弟が再會
いたすと云ふは此の上もないことであるが併し其方の殺氣は
未だ抜けず今より三七二十一日の間だに王口の刀を相懸して
鍛ち上がつた時に鑑定をいたしそれにては殺氣が抜けぬこと

名 刀 村 正

なれば思ひ歸らめて倅れを仕込んで業を譲り其方は刀鍛つこ
とを止め給まへ必らず其方が鍛つた刀は血を見ぬ中は鞘に納
まらぬ之れを聞いて村正は悲歎の涙に暮れ 村正「實に恐れ入
りました何は兎もあれ見苦しくとも何うぞ私しの家へお越し
を願ひたうございませすこゝで妙見山へ参詣をいたして正宗は
二人の弟子を連れて麓とへ降り村正の宅へ来て足を留めまし
たさて精進齋して其の日より向ふ二十一日の間だに正宗が
向ふ麓を勤め村正が元龜を勤めまして三口りの刀を鍛えまし
たこゝで研ぎを上げ鞘に納めやがて正宗は正面に着坐なして
心を落付け村正並らびに兩人の弟子を左右に置き宜ろしく
鑑定をいたせしが見れで見る程物凄く 正宗「是れ見られよ村
正「妙見山の頂上にて此の正宗が切りたる刀の如く矢張り殺氣
は少こしも抜けず刃形に焦立つところばかり多く何うも性質

名 村 正

援けざることであるから我が婿貞宗に申し付けて其方の俵
 の正俊を仕込み其方の後を継がせて天晴れ物の役に立つ刀を
 鍛ち上げるやう計らふて取らすから其方は何うか今日限り
 刀鍛つことを止めて貰らひたいと云ふ正宗の言葉聞いて村正
 今は是非なく鞘を拂らつた一口りの刀で黒髪をアツツと切つ
 て落し村正是れにて世の中の罪滅ぼしを致したりされれば此
 の印しに勘當お許るし下さるべく……正宗ア、其のことは
 如何にも承知いたした、それでは手紙を認ためるから此の手紙
 を持つて鎌倉へ参り貞宗に俵れの儀を相頼むが宜ろしい其方
 は他の職を學ばうともそれは掃まはねが頭りの毛を切りしど
 ころを見れば後世の菩提を吊らふ心か……村正如何にも仰
 せの如くでございます「そこで正宗はお弟子を連れて此處を立
 ち出で諸國を經廻ぐつて鎌倉へ歸へりました是れより村正は

名 村 正

所帯を閉まひ隣家りの上総屋傳兵衛を始め遠近の人に悉ごと
 く別がれを告げまして女房松江並らびに俵れの太郎正俊を遣
 りて鎌倉へ参りました、久し振りにて兄弟弟子の貞宗當時正
 宗の婿正宗の娘のたがね其の外國九郎正親などに面會して
 俵れのことを具れ……も頼みました、さて是れより勢州桑名へ
 参りましたところ村正の兩親は既に此の地に於て世の中
 を去りました後とでございます尤も是れは村正が備前の國
 長船兼光の許にをりまする時に兩親の亡くなりし音信れを聞
 いてをりましたのでございます依つて村正は勢州桑名の在に
 庵を結すんで毎日念佛を唱なへて夫婦のもの此處にをりま
 した、正長元年九月三日年七十三歳にて村正は世の中を去り
 ました此の子孫は村正の子正俊より九代にて終はる、さて讀み
 續づきました村正の傳記も先づは是れにて局を結すふこと、

名 刀 村 正

いたします。

名刀村正之傳 大

明治卅三年六月三十日 印刷
同年七月五日 發行



發行所

文 事 堂

東京市神田區金澤町十六番地
一立齋文晁事

講演者 中山金之助

發行者 同神田區新石町四番地
市川路周

印者刷 同同區松下町十番地
横田磯吉

東京市神田區新石町四番地

文事堂新版講談小說書目

<p>桃川燕林口演 今村次郎速記</p> <p>赤穂後日物語</p> <p>全十冊 一冊二付 二十錢 全部一割引</p>	<p>桃川燕林口演 高島政之助速記</p> <p>西遊記</p> <p>全五冊 一冊二付二十錢</p>	<p>松林伯圓講演 今村次郎速記</p> <p>源平盛衰記</p> <p>全四冊 一冊二付</p>	<p>桃川燕林講演 今村次郎速記</p> <p>赤穂四十七士傳</p> <p>全十冊 一冊二付 二十錢 全部一割引</p>
<p>桃川燕林講演 今村次郎速記</p> <p>德川十五代記</p> <p>全七冊 一冊二付 二十錢 全部一割引</p>	<p>桃川燕林講演 今村次郎速記</p> <p>太閤記</p> <p>全二十冊 一冊二付 二十錢 全部一割引</p>	<p>桃川燕林講演 今村次郎速記</p> <p>通三國志</p> <p>全七冊 一冊二付 二十錢 全部一割引</p>	<p>桃川燕林講演</p> <p>大久保彦左衛門</p> <p>全三冊 一冊二付二十二錢</p>
<p>桃川如林講演</p> <p>倉宗五郎全二冊</p> <p>一冊二付二十二錢</p>	<p>桃川燕林講演</p> <p>梅川忠兵衛全一冊</p> <p>二十錢</p>	<p>錦城齋貞子講演 探偵</p> <p>明治天一坊全一冊</p> <p>二十錢</p>	<p>伊東駿湖講演</p> <p>鬼坊主清吉全一冊</p> <p>二十錢</p>

217
26

松林白燕口演 尼十勇士銘々傳全冊 二十卷	錦城齋貞主講演 白石嘶全冊 一冊	桃川燕林口演 木戸孝九傳全冊 二十卷	大久保利通君傳全冊 十五卷	探偵 女天全冊 一冊	小三金五郎全冊 二十卷	長門 八仇討全冊 一冊
錦城齋貞主講演 荒川武勇傳全冊 廿五卷	錦城齋貞主講演 俠客三世内全冊 二十卷	三遊園口演 牡丹燈籠全冊 廿五卷	十坂會九道 中降栗毛全冊 二十卷	田邊南陽講演 石道丸全冊 廿三卷	田邊南陽講演 三建太夫全冊 二十卷	真龍寺水鏡演 朝日奈三郎全冊 一冊
田邊南陽講演 高橋松之助傳全冊 廿一卷	松前屋五郎兵衛全冊 廿二卷	錦城齋貞主講演 西郷隆盛君傳全冊 廿五卷	錦城齋貞主講演 釋迦御一代記全冊 三冊	田邊南陽講演 岩見武勇傳全冊 一冊	伊東辰馬講演 赤尾林藏全冊 廿五卷	色井一雄演 平井權八全冊 一冊
錦城齋貞主講演 梅野由兵衛全冊 二十卷	石井常右衛門全冊 十八卷	伊藤博文君傳全冊 十八卷	伊東辰馬講演 備前騷動全冊 廿五卷	敬天天下茶屋全冊 十八卷	田邊南陽講演 伎鎗持助全冊 十八卷	桃川燕林口演 利生院藏書寺の仇討 全冊

097734-000-9

特10-12

名刀村正之伝

一立斎 文晁/講演

M33

DBS-1671

